

持41

953

笑吟
録入

西遊記

卷六



繪本西遊記卷之六

目錄

心猿 猿 透陰陽體
魔王 還歸 大道真
心神 居舍 慶歸 性
木母 同降 怪體 具
群魔 欺本 性
一體 拜真 如
比丘 憐子 道陰 神
金殿 講魔 談道 德

姪女 育陽 求配 偶
心猿 守主 識妖 邪
鎮海 寺心 猿知 怪
黑松 林三 衆尋 師
蛇女 求陽
元神 護道
心猿 識得 丹頭
蛇女 還歸 本性
難滅 伽持 圖大 覺
法王 成正 體天 然
魔王 討者 師

木母 助威 征怪 物
金公 施法 滅妖 邪
鳳仙 郡目 天教 早
孫大 聖觀 音施 殊
禪到 王華 施法 會
心猿 木士 授門 人
黃獅 精進 散釘 紀會
金木 士計 圖約 頭山

卷之六目錄

繪本西遊記卷之六

行者の瓶の中に入りし身を小小變じ少時蹲り居ける處も忽然として四面都て火燄となり
主條の火道出たりて行者が上下に盤遶る行者則ち呪語を唱へ遊火訣の印を結び氣を住て座
けれども漸々火勢甚しく孤拐の肉已も和ぎければ行者心中も慌得て斯の如くあらば漸
々孤拐の骨も化歸湯を成べし此裡に化し死す師父を佐けて西天に行事能す万年の功業一
日も暇ある口惜しむと覺す涙を流しける忽ち前前陀盤山まで觀音菩薩の救命毫を賜り
し事を思ひ出し腦後を搜り見れば果然硬き毛三根あり行者嬉しく遂は是を拔下し一根を鋼鑽
と變じ一根の竹片と變じ一根の細き綿繩と變じさせ竹を張弓とあし彼鋼鑽を以て底小向ひ
穿鑽しければ直一箇の孔を穿透たり火勢此孔より漏出て冷氣を生じ行者大い小懼喜三根
の毛を納め頓て蟻蝶虫と變じ此孔より潜り出忽ち門外へ飛行本相を現し三藏の居る方へ
駈返り師父々々妖魔を伺ひ來たりといへば三藏曰く汝久く飯らず我深く愁ひたり山中怎
麼ある妖怪ありや行者則ち小鎖風を變じたる事より瓶の裡に裝入られ辛うとて身を脱れ飯

魔王還歸 大道真

行者の瓶の中に入りし身を小小變じ少時蹲り居ける處も忽然として四面都て火燄となり
主條の火道出たりて行者が上下に盤遶る行者則ち呪語を唱へ遊火訣の印を結び氣を住て座
けれども漸々火勢甚しく孤拐の肉已も和ぎければ行者心中も慌得て斯の如くあらば漸
々孤拐の骨も化歸湯を成べし此裡に化し死す師父を佐けて西天に行事能す万年の功業一
日も暇ある口惜しむと覺す涙を流しける忽ち前前陀盤山まで觀音菩薩の救命毫を賜り
し事を思ひ出し腦後を搜り見れば果然硬き毛三根あり行者嬉しく遂は是を拔下し一根を鋼鑽
と變じ一根の竹片と變じ一根の細き綿繩と變じさせ竹を張弓とあし彼鋼鑽を以て底小向ひ
穿鑽しければ直一箇の孔を穿透たり火勢此孔より漏出て冷氣を生じ行者大い小懼喜三根
の毛を納め頓て蟻蝶虫と變じ此孔より潜り出忽ち門外へ飛行本相を現し三藏の居る方へ
駈返り師父々々妖魔を伺ひ來たりといへば三藏曰く汝久く飯らず我深く愁ひたり山中怎
麼ある妖怪ありや行者則ち小鎖風を變じたる事より瓶の裡に裝入られ辛うとて身を脱れ飯

し事を語り彼三個の妖魔甚手強く數方の小妖的あり我一個他と戦ひたし今八戒を領し再度那里へ行べしといへば八戒は從ひ兩個とも雲を跨り走つて獅駝洞の門前に至り行者高く呼つて妖魔快く出来つて孫悟空が手列を見よと叫びけれ門を守る小妖驚いて大王此由を報ず三個の妖魔是を聞いて大いに驚き彼行者當に陰陽瓶の中に入れて今程の程の化靈て水と成たらんと思ひし他怎麼して抜出けんと怪み急ぎ陰陽瓶の有處に至り彼瓶の蓋を把て裡を見れば悟空の在す却て底は一箇の孔を穿たり悟の悟空此孔より潜り出しと覺わたり然れども這所奈何して孔を穿如何して此小孔より出よけん且怪み且驚き忙然として立たる處に行者門外も在て万般と罵りけるよぞ老魔忿然として謂て曰く我等西方路上も在ての武勇の名あり今日孫行者も侮設れ他と敵する者無んや名を千歳の末も辱しむべし命を捨て戦はんよ何ぞ怖るゝ事有んと刀を把て門外も跳り出呼つて曰く孫行者我言を聞我軍兵を出し汝を捉ゆる事安しと雖も然しての汝我手列を知事能ト我今汝と戦ひ快く難を決すべし行者笑て曰く怖くの汝一個我對する事能ト必ず逃る事おかれと兩個遂も手を交へ五六十合戦ひける時八戒堪へかねて師兄我代つて突止んと釘鉈を把て腕出れば老魔二個も敵し

難く忽ち本相を現し一個の青獅と成口を開いて八戒を呑んとす八戒大いよ驚き頭を回して逃出す行者の却て眞面の上前より鉄棒を身お收め彼獅の口裡へ飛入けり八戒是を見て行者を怨み此獅馬温の死生知す却て他が口も入り何故ぞ明日の必ず大恚と變トて出るあらんと獨言急いで舊路も逃返りける三藏の沙僧と俱ふ兩個が歸るを待るふ處へ八戒喘呼の跑来れは三藏驚いて曰く八戒怎麼狼狽しく飯りたるや悟空の未だ歸すや八戒曰く師兄の妖怪お一口よ呑れ我一個漸々脱れ飯りたり三藏是を聞て忽ち動と地も倒れ悟空汝よく妖精を降すと思ひしよ今日却て妖怪の手も死に痛べしと聲を放て哭るふ八戒師父を勸解んともせず沙和尚快く行李を開け悟淨が曰く二兄行李を開いて何を出すや八戒曰く行李を分ち取て個々別々よ去ん汝の流沙も立歸れ我の高老莊も往て我渾家の面を看白馬を賣て師父の棺を買て葬送の準備を爲べし三藏是を聞て更も心を傷り天も哭き地も伏て只管哭きて在します却説獅駝洞の妖魔の行者を一口も呑終り洞中に立飯り我孫行者を拿へ来れりと呼りければ二魔懼春て曰く長兄那處も拿置るひしぞ老魔曰く我他を一口も呑今我腹中も有三魔大いよ驚いて曰く大奇大いよ過ちるへり孫行者を吃するふ事申中らす行者肚裏も在て曰く我を吃

する事大いし中し我飢たれば此肚裡の臟腑を喰ん小妖聞て不好々々行者大王の肚裡に在て
 説話すと恐れば老魔が曰く我手列在て他を呑養を出すと那ぞ恐れん誰か快く湯を取來
 れ肚お濯て他を吐出し蒸熱して酒の肴とせん小妖頼て盪白湯を把來て大王は棒々老魔是を
 取て吃盡し喉を開て吐けれども行者敢て出ず老魔汝奈何て孫行者汝怎麼出來らざるやと云
 ば行者肚裡より答て曰く汝生だ不通變あり我出家人原衣腹あし今秋涼の時節我尙單の腹穢
 を着す此腹の裡暖よして風を透さず冬を過て後出べし衆妖是を聞て還斷大王の肚の裡よて
 冬を過さんといふ怎麼して善ん老魔が曰く他冬を過さんとせば我座禪をさし搬運の法を行
 ひ一冬飯を喰す強馬温を餓死せしむべし行者曰汝猶世事を知らず我廣東より過來り一箇の摺
 疊と鍋ぞを持て入れたれ汝が五臟腸を取難碎ま煮て食せば來春まで乏しらじ老魔小妖
 よ命トて藥酒を取來せ汝等怖るゝ事なうれ我今此藥酒を飲還斷を苦め殺すべしと一連に七
 八鐘を飲けるを行者酒香を得て此酒を他に飲せじと頭を叩臥の口に變じ他が喉の下受て
 酒を盡く行者が口へ吸受ける老魔鐘子を下に置不止や此酒平日の饒よ二鐘を飲ば肚裡火
 の如くあるよ今七八鐘を飲ども些しも醉ざるの何故あらんと只管お怪みける行者原來酒量

高からず今七八鐘を連飲よしたれば忽ち大醉し肚の裡よて舞踊り或ハ鞍穩堅騎樂翻根頭
 して騒げるにぞ老魔肚中大いよ疼み苦みに堪がたく地の上に轉倒れ只管嗚呼て絶入りたり多
 時有て行者些し醉醒手足を止て定りければ老魔漸々蘇生苦氣ある聲よて大慈大悲憐天大聖
 南無孫行者悟空菩薩万望我を助けるへと叫りけり行者曰く汝然様に詞を費すべからず唯孫
 外公と唱ふべし是を聞又呼つて曰く外公外方望の慈悲を垂て我一命を饒しるへ我今
 唐師父を送りて此山を過さしめ活命の恩を報ト奉ん行者曰く我汝が命を饒さば汝怎麼し
 て師父を送るや老魔曰く我原金銀珠玉の贈るべきや我等兄弟三個一乘の橋兒を擲て師父
 を駕て送り候ん行者打笑ひ橋兒を以て師父と送らば金銀の贈より尙勝れり你口を開け我出
 去んといへば老魔急ぎ口を開ける此時三魔走りより老魔が耳を口を悄悄のて曰く他が出
 る時齒と咬合せて還斷を咬殺るへといふ行者肚の裡よて忽ち悟り先金箍棒を出して試みけ
 るふ老魔果して咬合せ鉄棒は嘴的て却て門牙を碎さけり

心神 居舎 魔 歸 性

木母 同 降 怪 體 具

其時行者怒て曰く你我を欺きて咬殺んとす我再度出ずとて鉄棒を抽回ける老魔三尸を怨で

曰く是却て汝が過あり今怎麼して他を出さんや三魔曰く長兄怒みるふ事あり我計り有
 とて高聲よ呼つて曰く孫行者耳定に聞汝が名を聞と雷の轟く如く南天門よて威を現し靈
 霄殿にて勢ひを震ひ今又西方路上に有て妖を降し怪を拿ふ古今無双の英雄と思ひしに却て
 一個の小輩の猴兒あり行者曰く你何を以て我を小輩といふや三魔曰く汝若出来りて我と賭
 闘を爲す其の英雄と稱すべし那ぞ人の肚の裡潜隠れ我門を恐れて出来らず小輩ならずして
 抑 何ぞや行者是を聞て思ふやう他が言も 理あり我若出せ在る實名を失ふべしと思ひ
 答て曰く汝既に我と賭闘を求んとす我今出行べし唯洞内窄く器械を遺ふに不宣廣き處も出
 て我出るを待べし三魔則ち許若の小妖的を領し門外陣を列ね二魔の老魔を佐けて門を出
 孫行者出来れ此處場廣し快く勝負を決せよと呼りければ行者又思やう他亦反計計たし左
 右計器をもつて他を苦め快く師父を送らしむるお如じと數十根の毫毛を抜四十丈計りの大
 繩と變じ妖精の心の臟に緊きうけ繩の尾を手を取て咽下に至り亦思やう若口より出せば此
 繩を咬斷れんも計り難し齒のあき處より出べしと上臆より鼻の孔も潜り出れば老魔忽ち一
 聲噴嚏をさし行者の透ぬ逃奔 出則ち一手に彼繩を挽一手に鉄棒を取急よ雲を飛升り力を

極めて繩を挽バ老魔又初て痰を覺ぬ天に向ひて釣楊らる行者又地お下り横繩を引バ老魔
 風車の輪る若く空中より滾び落行者は從ひて牽れ行二魔三魔是を見て大いよ驚き一齊に繩
 よ離り落下て曰く大聖爺々の海量の神仙と思ひしに却て這様よ巧欺るふや行者笑て曰く這
 様怪ども十分無禮あり前に我を欺きて咬殺んとし今又我を欺きて幾万の怪兵を以て我一箇
 を圍んと計るは何の道理ぞ妖魔一齊お拜して曰く嚮の事の都て皆我門が罪過あり今慈悲を
 以て命を饒しるのや管す老師父を送り奉ん行者然バ汝等刀を拿て繩を割て歸りされ老魔
 が曰く外の繩の割と雖も心中お残り住りたる處怎麼せん行者曰く汝等既お師父を送んと云
 其言偽り無や老魔曰く繩を解て給らば則ち送り奉ん更に偽り棄べうらす行者頓て身を
 揺りして毛を收れば有し繩忽ち消て老魔初て瘡みを脱れ衆妖大家拜禮し大聖早歸りるへ我
 等頓て橋兒を以て御迎へよ參るべしとて兵を收めて洞中お飯りけり行者も身を回して急ぎ
 師父の許お飯りける三藏の倚地お倒れ只啼哭て在ける沙僧身邊に在て佐け居けるが忽ち行
 者が来るを見て三藏八戒を怨喝て曰く汝専ら能人を怕す悟空曾て死ざるを汝却て死
 りといふ那里より来る者の誰ぞや八戒曰く我明くは他が妖精に吞れたるを見たり思ふに他

師父に念を残し魂を回し来る幽霊やらん此時行者廻り着是事を聞八戒が顔を打て曰く我
怎麼幽霊やらんや向ふ妖魔我を呑し時我妖怪が腸を挽五藏を掴み他疼に苦み再三命を饒
されん事を乞是に依て他を饒し當今轎物を以て師父を送り此山を通しめんとなす三藏是を聞
て且驚き且懼喜悟空大いに汝と勞したり我今再生の心地せりとして手を拍て嬉びるふ却説那
妖精等の既に洞中へ歸り二魔老魔を對して曰く我本孫行者を九頭八臂三身の大漢あらんと
思ひしふ却て五尺は足ぬ小猴あり我此洞中幾万の部下を吐ても他一個の弱し殺すべし當
今長兄の命を救ん爲他を欺き歸すと雖も眞實他を送るべけんや長兄我に三千の軍兵を興へ
るべし必ず行者を捉へ来るべし老魔是を聞て奈何も汝が心に任すべしと云ふ二魔大いふ歡
喜急ぎ三千の小妖を點じ經お洞門を出て山を下り大路お添て陣を列ね一個の小妖前み出我
二大王爰は在孫行者快く出て雌雄を決せよと呼りけり八戒是を見て大いふ笑ひ師兄妖魔を
降し轎兒を以て師父を送ると云ふ却て亦戦ひを求るの那ぞや行者曰く老魔既も我を戒られ
取て出せず定めて彼二魔が我等を送る事を願すまた來て戦ひを要るあらん我思ふは此妖精
兄弟三個道徳も義氣あり我們も亦兄弟三個我既も老尸を降す你も亦二尸を降し来るべし八

戒曰く我那ぞ他を怕れんや曰く他を拿來んと釘鉈を取て山懸り跑登り假妖怪疾く出來て我
手列を見よと呼りければ二魔大いふ怒り鎗を擧て跑來り兩箇崖上は在て相戦ひ未十合ふ至
らざるも八戒既も力疲れ身を轉て逃んとすると二魔快く鼻を伸て捲住じ衆妖怪と鼓波の
けて洞中へ挽回けり三藏遙る是を見て悟空快く他を救へと曰ひければ行者笑て曰く師父も
甚 偏心あり我擒られたる時些しも念も懸るべし他一度捉へらるれば却て道徳も憐れ
ふの何事ぞや三藏曰く你が擒られしを我何んぞ念も懸ららんや思ふは你的能變化をよし必
ず身を破し至らず他の生得愚されば妖怪が手を脱るゝの智あり你快く救ひ來行者則驚き驚
空中を走つし思やう彼獸子我を死たりと阻たり且樂も苦もさせて然て後敵んと一個の猿
虫と變じ洞裡へ飛行は不便や八戒手脚を控縛後園の池の中へ浸置れたり行者是を見て前日
沙僧が説語も他私房録を借し持と云しが不知邪處も置置たるや且他を一嚇し驚て取出させ
んと則ち八戒が耳際へ飛行怕醜氣ある聲を作り猪悟能を々々と呼ければ八戒怪みて曰く我法
名を呼ひ難あるや行者曰く我の冥途の使あり五焰王の命を受你を迎ふ來たり八戒大い驚い
て曰く長官曰返りて五閻王も羨ませるへ五閻王の我師兄孫悟空と甚好敵あり師兄の面も愛

て一両日と待て給ひるべし願て妖精等が師父を捉へ来りし時師父と一同む往候はん行者
 曰く五閻王已よ你を三更死と住定置るへども我方便と以て一日を延引すべし但し我今より
 外の處は彼て你が代りの別人と伴ひ飯んと思へども盤纏を持来らせ今腹中餓たり你定めて
 盤纏有へし些し我お與ふべし八戒曰く我は是出家人なれば盤纏有んや別人は問て要めるへ行
 者曰く汝已よ盤纏を我外に行事能す然らば你も繩を掛て掛飯るべし八戒得て長官且繩
 を出するよ長官の索の追命繩と云て是を掛れば則ち息絶ると聞り吾此幾年上積來置
 たる銀錢四五錢耳の裡は有吾今細られて手を動す事能はず長官親手取出しるへ行者則ち
 他が耳の裡を搜れば果而四五錢の銀子あり行者是を取出し堪うねと笑ひ出し本相を
 現しければ八戒是を見て天殺的の痴馬温今此困苦の境成よて人の銀子を偽り奪ふやと牙を
 咬で罵りけり行者打笑ひ財は小事あり吾且你が命を救んとて鉄棒を拵て池より撿げ
 出し縛めを解放て八戒懼音行者と俱へ洞門を走り出門の一邊は釘把の捨て有けるを奪取
 て門を出んとする處を許多の小妖是を見附通さしと追來る兩個釘把を返し棒を置ひ當ると
 伴儂打殺し遂ふ門外走り出たり二魔是を聞て大い怒り鎗を擧て門外まで追來り行者と

少時戦ひけるが忽ち本相を現して鼻を伸て行者を搥んと前み傍を行者の双手は棒を横たへ
 却て他は腰を搥せ鉄棒を鼻の孔へ突入れれば二魔驚得大い驚き鼻を伸て退くんとするを
 行者遂に鼻柱を掴み前へ向ひて掛下れば二魔疼み甚しく行者は眼み牽れ行八戒の後より
 釘把の柄を以て他を打同個の象奴を見如く師父の處を牽る三魔是を見て徒弟等且他を傷
 る事ありれ他若吾等を送りて山を過る命を饒して飯せよと曰へば二魔地を墮下て曰く唐
 聖僧若わが命を饒しるいと必ず輪兒を以て山を過らしめ奉ん更なる難改致すべからず行者
 曰く吾們師徒の俱は慈悲を最事とす然らば你が言は従ひて命を饒し返すべし這般難改致さる
 ば再度命を饒したなしと遂に放ちて歸しける二魔の師徒は向ひて拜謝し急ぎ洞中へ走飯り
 有し事ども仔細語りなげせんぞと議しければも衆妖個々黙然と一言を出す者もあし其時三
 魔上前出て吾一個の謀計あり必ず唐僧を捉ゆべし謀計の次第は這様々々と仔細示教けれ
 ば老魔二魔大い懼怖急ぎ衆妖も命じ一頂の輪兒を擡げさせ三個の妖魔つゝ添て三魔の處
 よ到り當下送り奉るべしと個々墮下て云けるよぞ三魔の謀計をいとも知す遂に輪兒を座
 するひ行者八戒沙僧等の後を附添三個の妖魔先は上前崖上を登りて急ぎつゝ一日一夜に四

百余里の道を通りぬる難陀國の城地に至りける時三魔忽ち方天戟を擧て悪行者を刺んとす行者急よ身を轉じ鉄棒を振て相戦ふ老魔八戒は伏て懸り二魔沙僧は打てりる八戒沙僧釘釘を擧杖を廻し個々勇を震つて戦ひける兼て計りし事されば輪兒を擧たる小妖とも飛が如くみ城門に至り門を掛けと叫りければ門を開いて許多の小妖群り出三魔を城中へ廻へ入其餘の小妖等の白馬を率行李を擔ひ個々城中へ入りけり三魔の徒弟等の道を知らず只管戦ひ居りけるが八戒早く力疲れ身を回して逃んとするを老魔直り口を開き八戒を咬止り城中へ飛入小妖等と呼で細縛させ置又出來りて二魔を援けて戦ひ終に沙僧を捉へ城中へ捕回けり行者の兩個の師弟が捉へられたるを見て急よ雲を駕て脱けるを三尸本相を現し廻と伴て赶上たる原來行者が筋斗雲の一度放つて十方八千里を去と雖も此三魔が廻り一度捕り九万里を飛二度捕り十八万里を去此故に忽ち空中に在て追及終に行者を擧て飛回て城中へ入りけり

群魔欺二本姓
一體拜三真如一

三個の妖魔城中へ飯り入唐僧四衆を捉へたれば是を蒸熟して吃ふべしと小妖等よ命トて庭上より大なる鍋籠を居其中に水を汲入上より鉄籠を重ね且八戒を下の一隔に裝入沙僧を第二



隔に入行者を第三隔に裝上の第四隔に三魔を裝入乾柴を運び火を燒せ湯を湧せて蒸殺んとしたりける其時行者鉄籠の中在て一木の毫を抜假し行者が變トさせ鉄籠の裡に住り置我身の隱身の法を以て密に空中に飛登り雲端に在て遙し小妖等が立騒ぎて火を燒を見て若湯の湧滾たる時の師父の乍ら命を失ひるふべし且快く是を救んと呪詛を念て北海道王と呼出し此一條を仔細語り唐僧を守護するのれど頼みければ竜王龍んで承諾り願て身を一陣の冷風と變ト鍋籠の下より飛入火氣を押して昇らしめ斯どの如く老魔十個の小妖を呼て汝們輪流し火を燒て些し

も怠慢事あり我等はより器々安歇で明朝蒸熱したる時壁隙を窺へて空心へ受用すべし
 と三個の魔魔の個々寝宮よ退きけり行者空中小在て是を見届け頼て十根の毫毛を抜監睡虫
 と變じさせ投下し十個の小妖の面ふ一隻づゝ住せければ十個の小妖忽ち座睡前後も知す倒
 れ臥ぬ行者則ち鍋籠の一透よ飛下り鉄籠を開て師徒三個を救ひ出す三藏はじめ八戒沙僧も
 大いよ驚き且懼怖の悟空が眞身の外お在けるりと増々行者が神通と感じ頼て白馬と行李
 を尋出し前後の門の小妖等々護居て脱れケたりらん我等師父を援けて驢頭を越て取るゝよ
 如じと行者且竊お登り上より師父拽上る八戒沙僧の下より推上んとしけるが三藏災星未だ
 除す此時三個の妖魔忽ち睡を覺し火燒の小妖を呼けるよ一個も答せざりければ怪みて鍋籠
 の邊お立出現バ小妖等前後も知す熟睡し鍋籠の下よ火の氣もあく却て鉄籠みお打反り唐僧
 等も在ざりければ妖魔大いに驚き慌得怖の唐僧を逃したり快く來つて捉よと叫りけり許多
 の小妖一窩よ起出來り火把を取燈籠を照し城中都て白晝の如く四面お別れて查訪過る老魔
 終ふ三藏を見若忿然として牆の下お走り至り二度三魔も續いて來り再度三藏八戒沙僧を生
 擒許多の小妖是を拽立裡よ入て八戒沙僧の兩處の柱よ細縛つけ三藏の鼻宮の後邊ある鐘香

亭の裡お匿し置堅く鎖して守せけり行者の己よ牆の上お在し故急よ雲よ乘て身を運れ紙精
 等々都て裡お入城中些し靜りたるを見て又雲を下り城中よ入小妖の係お變ト師父の在する
 處を查訪よ只八戒沙僧の柱よ縛められて在師父の却て見ゆるのち行者頼て一個の小妖を呼
 て嚮よ大王の捉るひし唐僧の奈何ありしやと尋れば小妖答て我も是を知す爾お近士の説話
 を聞よ大王又孫行者が來り奪ひ行ん事を怕れ交生食するひし由あり行者是を聞又雲よ城
 外よ出口管洞を流しけるが密よ思ふやう此事都て如來の爲業あり他極樂世界よ居住し暇よ
 任せて三藏よ經を遣んと作言す若實お東土お經を傳んと思ひ他方より送り遣すべき事お
 るを却て我れよ來り要めさせ千山万水の艱難を歴今日爰よ至つて終よ命を失ひたり我今如
 來の處よ行て師父既よ失給ひし事を告我頭金の箍を外し故郷花果山お歸るべしと怒ち筋斗
 雲よ打跨て西方よ向ひて飛行須臾の間よ靈山お至り寶蓮臺お近着如來を拜し泪を漉の如く
 流し唐僧の妖精よ吃れたる事其外の事ども仔細よ語り方望の大慈悲を以て我頭金の箍を抜
 せるゝるべしと涙よ咽びて訴へければ如來笑て曰く汝心を惱す事あり彼妖精神通廣大
 かり我患眼を以て彼妖精を見よ老魔二魔ともお皆主人有彼三魔の却て我と些しの親わり行

者曰く其親といふの如來の父黨あるや母黨あるや如來曰く天地開初りし時万物盡く
生ず其中の獸の類あり禽の類あり獸の類を以て長とし禽の風凰と以て長とす風凰又交合
の氣有て孔雀大鵬を生ず此孔雀出世の時人を喰ふ事甚しく四十五里の間の人民を一口よ
吸入あり我其時雪山に在て丈六の金身と成し時又腹の裡に吸入られ肛門より出て我
金身を汚ん事を恐れ伏て他が脊上を割て潜り出雪山に登り他が命を傷んと思しんども諸佛
來りて會し孔雀を傷る事我母を傷るゝ等しと勸解住る故遂に他を雪山に止め習佛母孔雀大
明王菩薩と号したり今獅駝國の三魔の彼大鵬も一母あり此故に我些しの親わり行
者笑て曰く如來曰ふごとくあらば如來の却て妖精が誘ふ有や如來曰く我妖精の親因われ
ば我自ら往て他を降伏すべしとて阿難迦葉も命とて五臺山の文殊菩薩峨眉山の普賢菩薩と
宣給ひ此二尊を従へて獅駝國に向つて出給へば行者も同く雲・駕後を従ひ趕りける不多時
獅駝國の城地に至りければ行者且雲より下り城門を立て高く呼つて曰く業善早く出て孫悟
空が棒を領よと罵りけり三個の妖魔是を聞て個々器械を取て一齊に跑来る行者三個と對敵
よして少時戦ひ頓て戦ひ負て空中に逃升りて如來の金光の裡に隠れける三個の妖魔も雲よ

乘て赶上來りけるが忽ち三尊の佛菩薩の空中に立るふを見て老魔二魔大いに驚き彼激憤恚
麼して我々が主公を請ひ來りしやと急ぎ逃んとする處を文殊普賢の二尊御座高く畜生怎麼
歸り飯らざるぞと喝りるへば兩個の妖魔器械を投捨身を搦すと見けるが忽ち本相を現し老
魔の青髯二魔の白象と成りけり彼三魔の足をも恐れず行者を捉んと近づけるを如來手を舉
て指ざし給へば他も終つて本相現れ一個の大鵬金翅鳥とあり一線の縁を廻り掛られ再度遠
く飛事能はず行者其時金光の裡より立出如來を拜して曰く佛爺々今妖精を降伏するふ事
喜しと雖も己は師父を妖精等も吃れ我今怎とも爲事なし大鵬牙を咬で怒て曰く你激憤恚
の狠人を請來り我々を困苦却て我々を師父を喰れたりと惱るや你が老和尚現れ今錦香亭の
裏に在誰の敢て他を吃ひたるや行者是を聞て大いにお憤喜急ぎ如來を拜謝すれば如來速よ二
菩薩と俱ふ三個の妖魔を引領紫雲を放つて西天に飛去るふ行者の直ち城の中飛下りける
よ小妖等の三個の妖魔降伏せられしを見て大家四方に逃散して一個も止住居者なし行者速
よ八戒沙僧が索を解て三個とも後宮へ入錦香亭へ至り鎖を穿て裡を見れば果して三藏此處よ
居るひけり三個走り入て細縛を解て助け出し四個個々懐胎したへす行者仔細に如來の妖精

を降伏するひし由と語り多時城中お在て休息し飯を安排て固々吃し然して亦城を出西方よ
向つて急ぐれけり

比丘憐子遺三陰神

金殿譚魔談三道德

三藏師徒の難を遁れ數月を経て又一座の城地に至る市街最賑し中々家々の門
毎に都て一個の窟籠あり皆五色の絹を以て上を遮幔たり三藏是を見て怎麼やらんと怪みる
へハ行者我今見届来るべしと忽ち蜜蜂兒と變じ彼窟の裡に飛入て列ねて八九家と窺ひける
よ盡く五六歳計の孩兒を窟籠の裡に入置たり行者頓て飛降り來り師父此由語りけれと
も是又何とも分たず四徒四人彌怪み行處を遂に金亭驛館よいたる三藏驛丞よ見えて朝お
入て闕文を撰ん事を求めるへハ驛丞曰く今日已に晩お及んで朝お入る人事能す明日を待て
入朝するへ今宵ハ此街門お宿し給ふべしとて客房よ入て歇せけり三藏深く拜謝して其後
驛丞お問て曰く此城中よ見ハ門毎に小兒を籠お入置たり彼の何の爲あるや驛丞低首て曰く
長老是を問給ふ事ありれ明朝急いで西お赴さるへ三藏是を聞て彌々怪み再三仔細を問るへ
ハ驛丞則ち人を避け怕々喟々て語て曰く此國ハ原比丘國と号し候と近比民間の謠言よよつ

て小子城とよぶあり此三年前一個の老者一個の美女を伴ひ來り國王お献す國王此美女を深
く寵愛するひ遂に彼老者を國丈と稱し彼女子を美公と號け給ふ是より國王晝夜觀樂を貪り
酒色お溺れ近き頃の精神疲れ苦み大醫院の良法よ進むれども更お醫をなし彼國丈我海上の仙
方ありとて十洲三島よ去て藥を求め來り其藥引ふ千百一個の小兒の心肝を用ひ是を煎じ
て藥を服すれば千年不老の功有と國丈お教ふ任せ國中へ命を傳へ五六歳の孩兒を求め給ふ
彼籠の裡ある小兒の則ち藥引よ用ん爲あり人家の父母ハ王法よ懼表て表面よ悲み歎すと雖
も内心想計り給ふべし依て此城を小子城と号け候は是國王無道の事されハ長老明日入朝し
給ふとも管す漏し給ふ事ありれと仔細と告終りて驛丞の退きけり三藏是を聞て此國王怎麼
這樣無道なる許多の小兒の性命を斷て其身一個の毒を延んとするやと只管涙を流し給
へハ沙僧勸解て曰く師父悲み給ふ事ありれ極て彼國丈一個の妖邪めて人の心肝を喰んと思
ひ法を設て國王を欺きたらんも計りがたし行者曰く悟淨が言大いよ理あり我明日俵を變じ
師父よ跟て朝よ入彼國丈を窺ひ若妖邪あらハ他を捉へて國王お示し小兒等が命を救ふべ
し三藏曰く你若此小兒們が命を救ひ得ハ天大の功德あるべし唯怕くハ國王理非を察せず却

て我を罪せよ奈何行者曰く我自ら爲法なり今宵旦此小兒を外に匿し置明日其理の宜きに従
 以事を計ふべしと行者直ち半空に飛升り一聲の唵淨法界を唱へ城邊土地神并に揚請功會等
 の諸神を呼集先此比丘國王許多の小兒の心肝を取て藥引と爲んとす我師父此小兒等を救ん
 事と思ひ給ふ万望の列位彼小兒等を山林に匿し一兩日食を與へて守護せし給へるべし國
 王を正果に勸解て後箇々返し給へるべしと央ければ衆位の神聖都て許諾し忽ち一陣の陰風
 を發し滾々として城中に降り彼小兒等を籠と俱に盡く攝去行方も知す成ふけり行者則ち
 雲を降り師父に斯と告ければ三藏大いお懼怖再三行者と賞謝しけり其夜の個々安寐し天曉
 小至り三藏衣を整へて朝に入給ふ行者の蟬蟻虫と變じ師父の昆蟲帽子の上は住り居三藏朝
 門外ふて黃門官お見ぬ貧僧の東土大唐より西天に至り經を取の僧あり今關文を換ん爲玉
 城に至れりとして仔細に來歴を述給へば黃門官入て斯と報す國王旨を傳へて唐僧を殿上お
 宣登らせ關文を見終り寶印を用ひて三藏を返し與へ給ふ時忽ち當駕官上前出て國丈杖々
 來り給へりと奏すれば國王急ぎ竜床を下り身を躬めて出迎ふ三藏則ち一邊は座を避て密に
 國王を見給ふは相貌疲衰へ精神倦怠りて纒は骸骨を住めたる形狀あり不多時國丈殿上お至

り國王は禮をも爲す端然として箱壇の上お座し頭を回して三藏を看此僧那國より來るやと
 問國王答て曰く是の東土大唐より西天に至り經を求るの僧あり關文を換ん爲今爰來るや
 り國丈笑て曰く西方の道何の好處有て那國へ趣くや自古來唯道獨稱尊と云り他は佛門寂滅
 の如き唯用み功を費すのみ三藏是を傳給へども敢て一句の應答も爲給はず國王は拜謝
 し階下は歩み下給へば行者則ち師父の耳に乘入喃々告て曰く師父彼國丈の妖怪あり師父
 の且館驛を返り給へ我爰に住り居て渠が消息を見べしと云給て亦殿上お兼飯り朝暉の上
 お住り居三藏の前朝門を出館驛を歸りて待給ふ其時五城兵馬司使忙しく入朝し國王の前
 お奏して曰く昨宵一陣の冷風吹來り家々の小兒籠と俱に割去一向は踪跡知候はずと告しけ
 る國王大に驚き今日午の刻は彼小兒が心肝を取國丈が仙藥を服さんと思ひしは計らずも冷
 風を割去るは事是天より朕を滅し給ふ處あり國丈笑て曰く是天より階下を滅するも非ず
 却て長生を與へ給ふ處あり我今日一個の絕妙の藥引を見る千百十一個の小兒の心肝より
 れる事方々あり階下此引子を以て仙藥と服し給へば壽を延る事天地と同くらん國王是を
 聞て其故を問給へば國丈答て曰く當今來りし東土の唐僧の十世修行の真休元陽の氣未だ爾

す小兒の心肝は比ふれば万倍の功あり他今飯て歸降の禮を在へし階下快く羽林衛官軍を遣し彼唐僧を捉へ心肝を要給へ必ず脱し給へべしらす國王滿心憤懣遂に退き從ひ急ぎ旨を母へ羽林官を召給ひ此事を命じ給ふ行者是を聞濟し急る殿上より飛出館驛へ飛飯り本相を現し師父亦禍發りたりとて今聞たる動靜を告ぐ一も語ければ三藏聞て大いお驚き鞭を乾々とし魂を失ひたる如く呆々果々ぞ居りける行者曰く此難を脱んと爲む師父を徒弟と爲し徒弟を師父と爲す必ず何の患か有ん三藏曰く你果爾我を救ひ何ぞ你が徒弟と爲す慎んや行者曰く然らば快く準備を爲べしと且八戒快く泥を盛し取來れと云ければ八戒必得たりと釘釘を取て庭の土を築崩し尿を交て和げ持來りける行者心中不平と雖も急卒の間おれれば没奈何この泥を將て自己の面を撰作一個の鞍の鞍を印下夫を亦三藏の鞍に換ひ必ず辭を出し給ふ事勿れと眞言を念へ一口の仙氣を吹罹ければ三藏怒り行者が儀と變じたり行者又其身を搦して三藏の模様と變じ繕ひ準備整ひける時卒然と近邊履がしく三千の羽林軍早くも館驛を取圍み驛廬が指引よて一個の綿衣官客房に入來り唐長老我國王の請待し給ふ疾々來れと呼りけり此時行者の假唐僧出迎ひ綿衣大人最長きくも降臨し給ふ賞借何の徳有りて陛下

下の請待ふ違事 檀道何ぞ此上有ん今大人と俱に入朝し陛下を拜し奉んと直に客房を立出れば羽林軍士等前後左右を圍繞して急いで朝中へ還りけり

尋洞洞波紙逢三老童

當朝正注教要見

羽林軍士等假唐僧を執捉て朝中へ歸り殿前ふ至りければ假唐僧階下ふ立て高き呼つて曰く比丘王賞借を請給ふに怎麼の要給ふ事ありや國王笑て曰く朕偶一病を得て久く急す侍候ふ國丈朕も一方を贈ひ今長老の心肝を要りて引玉と爲し此藥を服せんと欲す長老敢て還を賜らば長老の爲ふ祠堂を建立し永く香華を國に傳ゆべし假唐僧曰く是甚易き事なり賞借原幾個の心肝あり不知國王今何色の心肝を要り給ふや國丈一邊より指定して曰く我只你が胸中の黒心を要ひ假唐僧曰く然らば早く刀を取來り給へ我今胸を剖開き若黒心有り難で奉ん國王是を聞て驚觀官命じ一把の短刀を取來らせ唐僧も與へける假唐僧刀を手お把衣腹を解開き刀を胸お剛的突立肚の皮剖開き五臟を搦んで抽出す國王はじり衆位の官人衆を見て個々色を失ひ膽を冷し面を背て居りける假唐僧臟腑の中より幾個の心肝を取出し衆官を呼んで點檢せしむるふ只是紅心白心利名心嫉妬心我慢心杯の有きも更も一個の黒心をし假

唐僧其心肝を取て原の如く肚の裡に收り忽ち本相を現し庭上にお立て呼つて曰く陛下全く願
 有て珠るし彼國丈一個の黒心あり何ぞ他が心肝を要て繋引と爲給ひさるや國丈行者が本相
 を看て大いお驚き你が天宮を闢せし孫悟空あらすやと云うと思へば忽ち殿上より走り出内
 院に飛入彼美公と諸供あ一道の寒光と化して那里ともなく消失けり國王群臣退を見て愕り
 國丈の一個の妖精にて却て此長老の眞の神僧にて有けりとして急ぎ行者を殿上にお請登せ國王
 問て曰く長老怎麼這樣お像を改め給ふや行者笑て曰く今朝來りしし剛ち我師父唐朝の御弟
 三藏法師我の其徒弟孫悟空と云者あり尙兩個の徒弟諸僧能妙悟淨師父と俱にお歸中よあり
 我も陛下妖邪が言を信下給ひ吾師父の心肝を要り給ふ此故我師父の像も變り來りて妖精
 を送けたり國王是を聞急ぎ衆位の官人よ命じ唐僧を請下來せ給ふ衆官個々降参り至り剛
 徒三個を迎來る行者急ぎ殿を下り師父の面を一口の仙氣を吹噴ければ三藏怒り眞の像も返
 り師徒都て殿上にお登り國王も相見ゆ行者國王も向ひ彼妖精が眞光を知給ひすや國王答て曰
 く始他が來りし時其住處を問たるよ此南七十里の一座の楊林坡あり其裡の清花莊に住すと
 云り朕不才よして深く他に在感され今日亦他も救うれて罪を法師老佛に得たり万望の神僧

大法力を顯し後日の惠を除き彼妖怪を降伏し給はゞ生々世々大恩を忘ぬべうらす行者笑て
 曰く我寔にお陛下に告べし彼菩薩の裡の小兒の我師父の慈悲を以て我に匿し給ひしあり剛
 下目師父と俱に少時爰に待給へ我八戒と俱に那里に去妖精を捉へ來るべしと直に雲を破し
 て空中に飛去ければ八戒擁擁いて雲に翹南を指て飛行けり國王群臣是を見て我門都て唐僧
 盟を異形の長老ありと怪みたりしが偈の眞佛臨凡ありと一齊に空を向ひて拜しけり行者八
 戒の七十里余り走り行雲を下りて見ば一服の清涼あり湖の一邊は千万株の楊柳岸を挾みて
 排列し却て清花莊の何處に在を見ず行者剛ち唵字眞言を唱へ當方の土地神と呼出し清花莊
 の那里に有やと尋ければ土地神答て曰く當方は清花莊と云ふし唯一個の清花洞あり行者曰
 く其清花洞の何所有や土地神曰く大聖南の岸は九又頭も分れたる一類の楊柳あり楊柳の
 下を左も三箇右も三箇轉りて両手を以て樹を撲て門を開けと三疊高く呼給ひし剛ち清花洞
 現れ出べし行者是を聞て且土地神を歸し八戒と俱に南岸も尋至れば果的一類の楊柳九條も
 分れたる有行者土地神の教しどく左も三廻右も三廻轉りて手を以て樹を撲て門を開
 けと叫りければ忽ち一聲の響ありて兩扇の門現れ門内の石屏の上は清花仙府と四個の大字

あり行者徑お門を開いて石屏の後み至れば彼妖精一個の美女を抱きて裡に居るや行者
を翻て大い怒り急お蟠龍拐杖を取て行者を打んとす行者鉄棒を以て架住兩個洞外に跳
り出千變万化して相戦ふ八戒彼九父の楊柳を押倒し釘釘を擧て踏碎さけれ鮮血液々と進
り喫々として聲を發す妖怪の行者と戦ひし終ふ力疲れ敵する事能はず身を搦して一蓮の
寒光と變じ東へ向ひて逃去んとす時不忽ち空中に南極老人現れ給ひ彼寒光を推住り大に
少時待給へ天蓬趕事を休よ八戒笑て曰く肉頭兒寒光を置住たるを極めて妖怪を捉へられん
南極壽星曰く妖怪已も愛も在万望の両公他が命を饋し給へ行者曰く南極壽星と相親むの怎
麼ある譯を壽星笑て曰く他の原我家の白鹿あり前日東華帝君我家も來り給ひ我と棋を圍み
て戯れしが其間他を國中に放ち置し他間を窺ひ爰に來りて妖怪とされり他出てより歸ら
ざる事既も三日を過天上の三日の下の三年我今漸々も尋ね得れり行者曰く己も壽星の物
あらば我等敢て他を傷じ快く領て歸り給へ壽星是を聞て兩個お拜謝し寒光を放ち一際を喝
し給へば遂も一隻の白鹿となり壽星則ち此鹿を打跨り踏んとし給ふを行者執住りて曰く今
比丘國王此妖精の欺りれ病を得て急す万望の彼國王の壽を延給へ壽星曰く我鹿を尋ねよ

出し故丹藥を持來らず唯懷中も三個の素兒あり是を你も贈るべし國王も與へて疾病を念せ
よとて取出して與へるへば行者是を受取め遂も壽星も執別れ八戒と俱ふ又清花洞へ歸り入
る彼美人數々就々外面も迷出んとするを八戒走り併て一鎗かつき殺せし忽ち本相現れて白
面の狐と成りけり行者是を見て是國王の愛したる美后されば拿歸りて他を見すべしとて死
蘇を手お執若て八戒と俱お頼て比丘國王も飛歸り殿上へ至り國王三寶等も見ぬ壽星と妖精と
取め給ひし事を語り彼國王の一個の白鹿もて此狐の則ち美后ありとて見せければ國王の大
いふ取入曰く懼喜奈位の官人等感歎も不絶忽ち東園を開いて素宴を設けし國王手親杯と捧げ
て三藏師徒も進め妖怪を降し小兒を救ふの恩を謝し給ふ行者又壽星より給ひりし素兒を國
王に贈り與へければ國王大いに歡喜直に是を服し給へば病立地に愈て精神健固に成ける
にぞ指々深く恩を謝し只管四個を接待けり斯て三藏の國王お辭謝を告て西方へ還ん事を曰
へば國王止事を得ず唐僧を竜車に座せしめ君臣后妃盡く城門を送り出ける時忽ち空中に聲
有りて大聖前日央みよ侍て小兒等を預りおきたり今日大聖功成て妖怪を平く伏て今還し送る
まりと云かと思へば破破落落と千百十一個の小兒と驚懼と俱も城門の前へ落しける三個の

徒弟是を見て城中の百姓ども早く来て小兒を受取よと呼りけり城中の百姓等此事を聞
りも皆我先ふと群り來り個々我兒を尋取只管歡喜騒ぎ笑ふも有は舞も有是都て唐僧等々
の思ひありと三藏の車を執回し亦徒弟等々異形ある姿をも怕れず八戒を后に親沙僧を手車
に座せしめ行者を頭に頂か一個に二十人三十人づゝ取若馬を牽荷を擔ひ城中に歸り入其形
勢言語は絶す國王も退と制する事能はず三藏師徒投奈何再度城中へ回入家々の供養を受
一月余り逗留し再三に辭退じつ漸々別れを告退し西方へ進みけり

始女育陽求三配偶

心猿守主國三妖邪

話表三藏師徒の只管西へ進みける處に一時一旅の黒松大林の中へ入て半日餘り行きも未だ
林を出る路を見ず三藏則ち馬を止りて曰く此林中使伴の閑雅あり我少時馬を憩へし你等
を求めて來れ行者領承ぬと應て且師父を馬より下し松陰の下へ座せしめ自ら鉢盂を取て
雲ふ打時空中へ飛行けり八戒沙僧も馬を繋ぎ掃見を下し林中を徘徊して其處爰遊び歩行け
り三藏は獨樹下へ在て多心經を念て居給ひしが忽ち聽彼處ふ人の叫ぶ聲して助給へくと
呼る事頗あり三藏大に怪み斯る深林の中何人有り在て斯様よ叫びぬるや是必ず虎狼の類よ

出遇たる者あらんと彼聲を視的は尋行給へば果て一林の大樹の下へ一個の美貌女子上半身
を葛藤を以て懸下半身を土裡に埋り置たり三藏是を見て大に驚て曰く女若何事
有て期都縛られ給ふや彼女子泪を流し答て曰く我家の爰を去事二百餘里貴國と云る處
り此程清明の時節なれば我父母諸人と俱ふ野へ出て遊し乍ら一夢の強倫現れ來り鎗刀を
取て斬て廻る我父母を之首諸人我前よと逃去ぬ我幼きよ使て驚視て地へ倒れ遠く強盜を捉
られ此山中へ執來り他等個々我を妻おせんと云て亦争ひを激發し因て我を斯林中へ捨置四
散お別れ去て往方を知らず我爰に在事已に五日五夜あり万望に老師父大慈悲を盡るひ我一命
を救ひ給ひ九泉の下へ在ても更ふ大恩を忘れ候へし三藏是を聞て覺す泪を流し徒弟等那
處に在と呼るへ八戒沙僧是を聞着急ぎ師父の許に馳來る三藏則ち八戒を命じて彼女子が
細糸を解放たしめんと爲るふ處に行者空中より是を見て急ぎ林中へ飛で下早く八戒を耳を
取て執倒しければ八戒驚き罵詈雑言て曰く師父今我を命じて這女兒を救しめんと你な麼我を
引倒すや行者曰く師父此女子を解事あり他は一個の妖精ふて我等を欺ん爲よ來れるさ
り三藏是を聞て悟空の云言生平に阻斷す既其如くならば我も亦是と不服とて畢く八戒を

止めて立去るへば行者大い懼喜急ぎ師父を扶て馬よ騎せ四箇一齊に西と指て進みけり
來這女兒行者が言ふ違す一個の妖精ありけるが牙を咬で行者を恨み此幾年孫行者が神通と
聞傳しが果然盧ならず彼唐僧童身より修行し一點の元陽を潰さず世と奪て配合と做大乙金
仙と成んと思しに不期這猴標に闘破れたり我再び法を設て他を呼返さんと思ひ唐師父を
人の一命を救ひざるぞ道様の薄情意を持ちながら却て佛を拜せんと思ふの何事ぞやと風よ
隨ひて兩三聲呼りけり三藏遙か是を聞て馬を住り悟空你彼女子が云首を聞能がいふ處大
いに理あり人の一命を救ふ事七級の浮屠を造るより勝るぞや我再び返て彼女兒を救ふべ
しと亦馬を轉廻給へば行者打笑ひ師父亦例の慈悲と愛し給ふ我も亦師父を治べきの良薬を
し若強て是を住り師父亦我を怒り給ひん唯心よ任せ給へとて個々原の處に立歸り三藏入
戒ふ命じて送ふ彼女子が縛縛を解とらせ釘把を取て他が半身を穿出せば彼女子大い歡喜
立上りて衣裳を懸へ三藏を禮拜しけり三藏の此女子を同伴て亦西に向ひて林中を歩行出給
ひける時悟空の只管笑て止す三藏の曰く這猴標怎生斯の若く笑ふや行者が曰く師父今住
人よ逢給ふ今宵の好樂あらん三藏是を聞て怒て曰く你乱説と云事あられど此時天色漸々

晚ふ及び松林の盡る處より一座の殿閣現れけるにぞ三藏徒弟門を呼で那里に必ず一座の寺院
と見たり我旦那里に往て宿を要むべし你們女菩薩を介抱して静ふ來れど三藏一個前よ進み
山門の立入少時待後居給ふ時寺中より色黒く筋骨露れ出たる道人走り出怪氣よ三藏と罵居
たり三藏是を見て怖れ你の妖精よ有すや我の尋常の信むわらず東土大唐より愛ふ來れ
り我手下に降竜伏虎の徒弟あり我を過ち奪て却て你が一命を乞ふ事あられど曰へば彼道人
跪下て曰く老爺々我の必ず妖精あらす此寺の飲海羅林寺を号し我の則ち寺中の香燈道人
あり爺々既よ遠方より來りるふ且道方へ入せるへとて二層の門内へ導引入ける時亦一個の
喇嘛僧走り出三藏の威儀堂々たるを見て大い懼喜たる光景よて三藏の鼻を搦耳を執肩を
按脊を撫て手を携て方丈の伴ひ入りけり是の喇嘛僧の人と親む體ありとや三藏已座を
着東土大唐より西天に到り經を求るの緣由を仔細語り今夜爰に一宿を過したる由を述るへ
ば喇嘛僧笑ひて曰く老師父歸りを云事あり東土より西天に至るも幾万里の山川を經亦妖
精邪鬼到る處都て多し老師父一人怎生能愛に到り給ひんや三藏の曰く我元來三藏の徒弟わ
り他等よく路を開き水を渡り我を守護て愛ふ來り唯今俱に門外に在實僧一個怎處愛よ到る

事を得ん喇嘛僧大いよ驚き我此所處妖怪精多くして夜ふ入てり絶て人の往來し徒弟何快
唐長老の高徒を呼來れと云ふ兩個の小喇嘛見急いで門外に出けるや乍ち驚き走り歸りて
曰唐長老の高徒の門外に居給はず却て三個の妖怪一疋の白馬を率亦一個の女子一途に在思
ふよ高徒の已小妖怪に吃れるふあらん三藏打笑ひ其三個の喇嘛我徒弟あり必ずしも妖怪よ
あらず一個の女子の松林中にて一命を救ひ來れる者あり他門都て怖るべき者も有す快く呼
來りるへと曰へば小喇嘛漸々心定め又門外より立出不多時三個の徒弟と彼女子を導引て
方丈にお入りけり

鐵海寺心猿知怪

松林三藏尋師

鐵海寺の衆僧等東土より聖僧の來れる由を聞きて方丈より集り來りて三藏と相見へ急ぎ同徒
み齋と進み彼女子を一途にお座せしめて相借させつ衆僧門一つより三藏の談話を聞二つより
彼女子と暗く親ひ亦女子を救ひ來れる事ありと聞已に三藏の涙も及びて彼女子の別々天王
殿より臥しめ三藏師徒の其儀方丈より交際せむ衆僧固々退きけり明旦より至りて徒弟何已
馬を借へ行李を取り師父の赴るふを待けれとも三藏只管沈黙して起出るべし行者明ら

父の枕を揺し兩三聲呼醒しけるとも三藏僅か頭を擡げ我何故といふ事を知ず頭重く身中疼
み一向に一身動し難しと曰へば八戒急ぎ手を伸て師父の身上を摸て曰く我能此病を知り是
昨宵錢費さる飯と見て餘りも幾碗喰過して傷食をしるひたり行者曰く你慢よ乱説を吐
事あかれ師父既よ不快あらば曰愛よ住り居て平復を待て路より出給ふべしとて遂に此寺を滞
留し不期も兩三日と過し一日三藏頭を擡て悟空を呼て曰く此兩日我病よ困苦て曾て問
ざりし彼松林よて救ひ來りし女菩薩お食を送る者有やと問給へば行者曰く師父自己の病を
實み給へ他々事を憂ひ給ふ事あかれ三藏曰く你少時我を扶け起して紙筆を取出して我よ真
へよ行者曰師父紙筆を要て何もし給ふや三藏泪を流して曰く我今斯る病を得て必ず愛よ身
を終るべし今一封の書を書て此旨を大唐皇帝よ奏し別よ亦人を擇で西天よ到らしめんと
欲す你我爲よ長安よ登りて皇帝よ我書を献るべし行者是を聞て大いよ笑ひて曰く師父今
少しの病あり忽ち這樣的に旺弱な事を曰ふや假令十分に疾重くとも老孫其府よ打入十大魔王
を捉住て禿問せば誰か師父の命を要るの有ん八戒曰く師父斯の若く曰へば人の姓名の計
り難し我等且造業の準備を爲す可らん行者曰く觀子乱説を云事あかれ你原故を知ず師父ハ

如來第二個の徒弟金禪長老の轉世めて師父前世のとき如來の會下にて座をとし左の足
 みて一粒の米を踏るへり此罪は因て今生にて三日の病疾あり今日過れば必ず氣快しるらん三
 劫曰く誠ふ我病昨日は比すれば同じからず今日口裡渴きを生じ凉水を得ん事を思ふ行者
 曰く師父水を思ひるべし病已み除きたるあり我快く水を取て進せんと鉢盂を取て寺中の香
 積厨に入けるが爰は衆僧都て一處に在るに涙を流して居りけるを行者怪みて曰く你等何
 を歎くや我輩が幾日爰に滞留薪米を費すと爰るべしわらすや衆僧曰く更に道徳の事ハ有らず
 那里よりか妖怪來りて前夜二個の小和尚を取れ只衣服と骸骨後園に有次の夜亦二個の和尚
 を吃れ昨宵又二個を失ひたり此三日已み六個の和尚を失ふ你的師父今病有る因て敢て是と
 告す我門此故に只管心を痛め歎くめて候ふなり行者是を聞て曰く是妖怪の處為す候ひまし
 我原妖を降し怪みを取の術あり你等が為す今宵彼妖怪を捉ゆべし必ず放心事かかれ衆僧此
 言を聞て思へらく他已み唐僧を守護し幾万里を經て爰に來る極て降龍伏虎の手列わらんと
 思ひ長老此地方の爲す妖怪を除きたるべし我輩が爲の再生の伴候あらんと云ふ彼兩僧曰
 曰く你等且其言を住れ今唐師父病あり長老若妖怪と戦ひるべし或は唐師父の愛ひを成ん行

者曰く院注の言理あり且師父は告て商議を傲べしと頼て氷を取て方丈より行師父小僧り興
 れば三盞只一飲お吃終り忽ち神氣暢達し亦兩碗の粥を過り病勢頓よ七分を減じけり行者是
 を看て大いに懼む夜に入て師父の病いよく快氣を見ければ則ち此寺中へ妖怪あり我門爰
 に滞留事既に三日其間六個の小和尚を捉れしとあり我今宵他輩が爲す妖怪を捉んと思ひ
 候ふありと告ければ三盞大いに盡き妖怪已み寺内の僧を吃ひ殺す我門も亦僧あり鬼死れば
 必 歎むの道理あり你能心を用ひて妖精と争へ來れと曰へば行者懼む唯一個佛殿に至り
 十四五歳の小和尚と變じ木魚を撞き鐘を念へ妖怪が來るを待居たり已み三更の頃に至り現
 月儀は影さす頃忽ち一陣の風颯と發り蘭麝の香り鼻を穿ち一個の美貌女子忽然と現れ來り
 佛殿の上り行者が手を取て曰く小長老何の經を念ふや少時後園に來り我と異ふ交際して
 樂みを成るへと行者が手を搦去んとす退を見て行者心中を想ふやう情の幾箇の愚僧們色欲
 も欺れて姓名を失ひたると覺わたり我今他を遣さんやと急ふ彼女子が手を執住り本相を
 現し鉄棒を把て打んとす妖精大いに驚き身を退き兩口の劍と抜出し佛殿の前にて兩
 個多時戦ひけるが妖精忽ち身を轉じて左の足の靴を脱脱履を念て本身の模様と變じさせ兩

口の剣を抜いて行者と戦ひせ置翼の身の一陣の清風と化し方丈を飛入三魂を攝りて何地ともなく飛去けり行者の是を心着す只管彼女子と相戦ひ遂に妖精を打倒し亦一棒を打んと爲す時却ては一雙の鞋と髪を縛りけるよど行者を見て首て覺り信の他が計策を陥入し口惜さよと急ぎ方丈を飯り入て看す師父の既居るは八戒と沙僧と二個忙々然て居たりける行者曰く師父の何處へ去るひしと八戒沙僧答て曰く今一陣の風至ると思ひしや忽然師父の見るはず是必ず妖怪の爲に捉れるひしからん行者是を聞て大いお怒り你等守護して在るが何ぞ空然と妖怪の師父を奪れたるや且你們と打殺さんと鉄棒を出しければ八戒備御驚き頭を抱へて身を縮め動さず沙僧の却て捲簾大將の臨凡よて事お馴たる者おれは些しも腹す行者が前を跳下師父少時待るへ今我々二個と打殺さんとするふの再び師父を奪りて花果山よ飯り去んと思ひるふからん行者罵て曰く我々ど氷簾洞よ飯んや唐僧を守護して西天よ至るあり沙僧が曰く師父誤らるへり若我々無んば誰か能馬を牽誰か荷を擔ひ誰か又食を造り薪菜を拾ひんや師父且怒を止て我々を免し明朝三箇同く力を合せて師父を奪り亦却て益有ん行者是を聞て理ありと怒を収め心を飯し然り明日你們と同く力を盡て師父を奪

て殺んべしと云けるふど八戒大い又憤懣此般の事の都て我身よ懲りたる事あり嗚我々も任せ置るへとて其夜の三箇とも方丈を夜を明し翌旦個々急ぎ起出て衆僧を呼て昨宵の事を語り又前日携米りし女子を尋らふ已よ去方を知らざれば信の道女子妖怪よて師父を奪ひ去たるふ疑ひましと云ければ衆僧等大い又驚き我等却て老師父の煩勞を憐たりとて且三箇ふ悉くを備めける行者が輩三箇の通馬を牽掃を荷ひ此妖怪の前日被女子の居たりし松林中よ住て尋らば速に知べしとて亦東に向ひて轉進し松林中よ至り行者則ち呪詛を念て此地方の土地神を呼出し此地は妖精在やと尋れば土地神答ていふ曾て妖精を斃し然とも此正南千里計り陷空山無底洞と云處あり洞中よ一個の妖精住り他昨夜一陣の陰風と假て此地方を通りたり極て他洞中よ廻りしならん行者是を聞て目土地神を飯し去しり八戒沙僧と徒俱よ白馬を牽て一齋の雲ふ打跨少時の間に南方千里よ飛行進り一座の大山頭ふ住り且八戒分付て洞府の有地方を尋ねけり

蛇女求陽

元神護道

八戒の山を下り一箇の小徑を求め五六里行り上前往ける處に忽ち同箇の女性わり井の邊よ

水を汲居たり八戒是を見て聲を發て女怪々々と喚ければ彼兩個大いよ怒り這和尙は不離あり
 何生我門を妖怪と喚やとて釣桶の棒を把延て入戒の頭を連打し打たりける八戒大いよ驚
 き頭を抱て山上より走り返り長兄此地方の妖精果て男狂なり彼山下より兩個の女妖あり我一同
 聲妖精々々と喚たれば他便ち棒を把て我を打たり行者是を聞て笑て曰く你己よ妖精と呼バ
 他少怒の理あり他今像を變ト再び他等を伺ひ來れ八戒曰く我今像を變ト行とも亦他門
 ふ打るべし行者曰く你他門を妖精と呼事ありれ他覺若我等と同ト年記ありバ始嫌と呼若老
 たらバ幼々と呼べし然らバ那ぞ打る事有んや八戒是を聞て我早く是を知バ他門を打れさ
 りしをとて遂に一個の黒胖和尚と變ト再び山の坡下より走り往かの女怪が水汲在ところみ到
 り施を施して姑嫂這様水汲を汲で何よしるふやと云バ兩個の女怪笑て曰く長老來歴を知る
 りす我家の老夫人昨宵一個の唐僧を帯取りるひ我門よ合じて除陽交嫌の好水を汲せ給宴と
 安排て唐僧と親里を飲ん要あり八戒這事を聞畢り急よ又山上より返り歸父の既よ妖精と親
 里を飲るふ沙僧疾く行露と出せ個々是を取分ちて故郷へ歸るべしと云バ行者曰く黙子亦凡
 説を飲り那ぞや然バ我門快く其女妖が後よ從ひ往て他々洞中より至り事の動靜を伺ひ來るべ



しとて夫より三個一齊に山を下りて遙か見
 ば彼三個の女怪が水汲を汲終りて南を向ひて
 歩行ゆく行者が腹三個も鼓み響きて行け
 るが一片の塵の揚りて彼女怪を看失ひけり
 三個急ぎ野里より至り崖の前より降り山に果
 然一座の樓門有樓上より虚空山無底洞と云る
 六箇の大字を彫附たり門内却て扉字なく一
 塊の大石十余里に跨る石の正中に一箇の洞
 あり底の深計り短べうらず行者是を見て
 是必ず妖精が窟穴なり休等少時爰に在て待
 べし我且裡に入て動靜を伺ひ來んとて身を
 掩して洞中へ飛入けり斯て行者洞の裡へ入
 て看バ却て明々如くとして暗是一個の世界

に出たる如く日色風聲花草竹木人間世界に異ならず行きて見れば亦愛は樓臺房舍許多あり行者忽ち一隻の蒼蠅と變つて奥深く飛入り見れば一個の草亭の裡に彼妖精色の美女と變じ數多の女妖的等を會へ筵宴の準備を倣居たり行者亦東の廊下へ飛行者三藏の一人の格子の鎖たる裡に座して忙然として在したり行者格子の裡に飛入り三藏の頭の上へ住り師父と一聲呼ければ三藏行者が聲を聞つけ悟空你来れる疾く我を救ひ呉よ行者曰く妖精當今筵宴の準備を倣師父と親事を倣んとす我思ふも師父の他と夫婦も成或は一男半女を生下給ひ却て師父の子孫を住め和尙と成る勝るべし三藏牙を咬で曰く你這堪も至りて尙我を救んと爲や我大唐を出しより以來一毫の忘念を生せず若此妖精も因て冥陽を亡ひて永世輪回も隨入て生々身を飯る事能ひる行者笑て曰く師父恨みる事事なれ我計策を設て救ふべし今妖精酒を備て師父に進せんとす師父少時堪て他が一鐘を喫師父又急も他を一鐘を喫鐘中に一個の喜花を掛記て他を送りる我其時蟻蜂虫と變つ喜花の下へ飛入他が肚の裡へ吞下したる時肚の裡へ入て心の儘に他を困苦降伏せしめ候ん三藏是を聞て大いに喜喜我其如く候べきありと曰ふ處へ妖精快東廊へ進み來り鎖を開きて裡へ入唐長老這邊へ來り一鐘を飲で候み

給へと三藏の手を携て抱立る三藏没何女怪と俱草亭の裡へ出るへ女怪且鐘子を舉て一杯を吃し三藏も與へける三藏止事を得ず鐘子を手へ取揚少時蟻蜂虫はします行者師父の耳の中へ飛入此酒の葡萄酒あり一杯を喫るふとも苦うらすと低語る三藏遂も此一鐘を喫終り向の計策の如く親手一鐘の酒を樽杯中へ喜花を掛起するふ時行者早く蟻蜂虫と變じ喜花の下へ飛入妖精が飲乾を待居たり三藏則ち鐘子を妖精へ送りるへ女怪大いに歡喜急ぎ手を取て三藏を拜し却て酒を飲す先鐘子を下へ指置て幾句の情話を訴つ少時して鐘子を取掲ける時彼喜花已も消果て彼蟻蜂虫現れ見ければ女怪小指を以て虫を掲げどり地上へ彈き捨たりけり行者謀計のならざるを見て口惜く思ひ即時一隻の大鷹と變つ翅を伸爪を輪開し酒肴卓席盤碟の類ひを盡く打破碎して外面を向ひて飛去たり女怪是を見て大いに驚き道洞中へ原這様ある養生を思ふも今日親事と倣ふ善ざる日みて天より此災ひを下せる成ん我父更も良辰を擇改りて唐長老と親事を倣べしとて亦三藏を東廊の裡へ送り推籠をさ小妖的を呼で筵宴の道具を収めさせけり却説行者の草亭を飛出草花の裡へ隠れて少時潛み居たりけるが忽ち後邊の方より散乱と香の烟り飄り出けるも行者不善思ひ身を轉して打探

看一一座の石壇の上へ一張の卓子を備け卓子頭は香を焚上面は兩個の大金宇の牌子あり是
を讀み一個は尊父李天王之位また一個は尊兄那吒三太子之位と寫着たり行者是を看て満心
歡喜遂に彼牌子と香爐とを取て直に洞外へ出八戒沙僧等が待居る處へ飛板り唾々哈々とし
て笑ひ居たり八戒沙僧是を見て問て曰く長兄道様は懽喜するふの師父を救ひ出するふもや然
れども師父の見るに事なる事何行者彼牌位と香爐を地へ指置て曰く我師父を救ふも及
ず此牌位を以て玉帝を訴へ奉らば師父の自然助り給ん沙僧が曰く此牌子那吒有りしや
行者曰く此牌子則ち彼女妖怪が供養する所の牌子あり想ふに彼妖精の李天王の女兒として
三太子の妹あり他凡氣を發して下界より到り妖邪と成て我師父を奪しものならん我今より天
上へ昇り此牌位香爐を証證と假玉帝に奏し奉り李天王父子を呼下して我師父を救しむべ
し八戒が曰く玉帝に奏聞せんには告文書くての協ふべからず行者曰く我則ち告文を主張べ
しとて頓て行李を開き師父の紙筆を取出し一張の狀子を認め是を袖裡に推納て牌子香爐を
手へ取て筋斗雲に打擲て急ぎ天上に昇りけり

心猿國得丹頭

姪女還歸本性

行者直に南天門の裡通明殿に到り四大師を迎ひ禮を作て仔細を頼み靈官殿の下に内顧て
玉帝を拜し牌位と香爐を取出し彼狀兒を呈上けれ玉帝是を取持て讀下し其文に曰
告狀人孫悟空年甲左膝係東土唐朝取經僧唐三藏徒弟告爲假妖一攝一陷人一口事彼有二托
塔天王李靖同男哪叱大子一閻門不諱走出親女在下方向空出無底洞變一化妖邪一迷害多
命一今將一師身一攝一陷曲遂之所一渺無踪跡一切恩伊父子不仁故縱一女氏一成精害衆伏之罪
難行一拘一至一察一收一邪一救一師一明一正一其一罪一深一爲一恩一便一有二此一上告

玉帝是を看畢て驚さるひ是全く李天王が過失たるべしと急ぎ狀子に判を居太白金星を宣て
命じるひ行者と同行狀子と持せて托塔天王の住する處の雲樓宮へ使しるふ金星旨を領し行
者を引將て李天王の宮宅に到れば天王急ぎ出迎へ禮畢て後彼狀子を受取讀も終す大い怒
つて曰く這猴孫我を悞ち告たり我怎生道様の事有んや金星曰く天王怒りを止るへ今牌位香
爐御前より有て証見とす天王曰く我唯三個の男子一個の女兒あり大兒の名は金吒と呼今如來
に侍奉て前部護法とある二兒の名は木吒南海に在て觀音菩薩の徒弟と爲り三兒の哪叱常に
我身邊に在て朝に隨て駕を護る一女の名は貞英と呼て今星儘に七竈人事も尙知ず怎生妖

精と魂んや道猴孫實と思ひし璧下界の小民すら誣告の罪二三等を加ふるの法あり況や
 我の天上の元勳あり且斬て後奏するの職を受我且他を斬て後入朝せんと魚肚藥父の諸將を
 呼遙入行者を細縛ければ金星の曰く我御前に在て他と同く旨を領す怎生他を縛めるふや天
 王曰く他が如きの反人黨に死し難し命星少時座するへ我且他を斬て後同く朝に入べしと砍
 妖刀を取出し已に斬んと爲處に忽ち一室に聲有て父王少時待るつと呼つて那叱三太子立山
 るふ天王是を看て你何の故に我を止るや三太子の曰く父王忘れるへる事あり實に女兒下界
 る在天王曰く我唯你們の兄弟のみあり怎生又外ふ女兒あらんや太子の曰く彼女兒の原
 一個の妖精よて三百年以前靈山に在て如來の香花寶燭を偷み食ふ如來我等よ命つて他を捉
 しめ給ふ當時父王如來おきて他が命を救ひるへり他其恩を思ひて遂に父王を拜して父と唱
 へ我を拜して兄と做後心を改めて下界に在て牌位を設て香花を備ふと聞り他不期も又妖精
 と成て唐僧を陷害却て孫行者よ我を告ぐる他則ち結拜の恩女よて同胞の親妹よあら
 す天王驚て曰く我實お是を忘れたり他が名い何とか云しと太子の曰く他三箇の名あり上首
 金鼻白毛老鼠精と云ふ者寶燭を偷む以て改めて半截觀音と号け後下界に在て亦地門夫人と做

く天王當下初て省悟し親手行者が繩を解んとするも行者却て身を轉過し唯か我繩を解んと
 するや我此儘に玉帝よ見て事の始末を奏すべし金星疾く我を列て飯りるへ李天王と御前に
 於て折弁せんと口よ任せて駈きけり天王没奈何金星を央て方便を求む金星再三行者を和め
 漸々よ縛めの繩を解下し殿上お座しめ金星又行者よ對ひ謂て曰く今大聖御狀を告て妖精の
 天王の女兒ありと云天王の我女兒に有すと云て兩個御前在て只管辨し理非速かふ不分
 どさひ必ず兩三日を過すべし天上の一日は下界の一年されば彼妖精強て師父と親戚を爲
 忽ち一個の小和尚を生ト遂に師父を洞中お住り置け却て你が心一箇よて一大事を過つ有
 すや今唯玉帝へ解狀を呈上て李天王父子と俱に下界よ至り你的師父を救ふに如し行者是と
 聞て打底頭老官兒の言實あり理あり我然らば你的面よ愛て此官事を任すべしと遂に一張の
 解狀を寫め命星と俱に靈霄殿に到り玉帝へ回奏したりける天王父子大さく懼喜急ぎ天兵と
 引領て行者と俱に南天門と立出て少時の間お下界お降り陷空山無底洞よと至りける衆て待
 たる八戒沙僧天王父子の來りるふを看て急ぎ禮を做て相見の事の仔細を語りあひ皆一齊よ
 洞口お至り且行者と太子と天兵を領て洞中お下りいる彼女妖精の此日亦結誓を設け三藏と

草亭の裡へ出已に親事と做んと欲する處に乍ら許多の人音聞えけるほど暫て外面へ跳り出行者を見て大に怒り忽ち兩口の劍を打振て伐て掛り看々後邊に哪叱太子の居るふを見て大い驚き恐れを做俄に地上に拜伏し倒れ臥ければ太子則ち衆位の天兵と命と縛妖索を以て女妖精を縛めさせ其外洞中の小妖們を盡く細り取洞門外に引出しければ行者の跡より師父を尋て助け出し洞を出て來りければ八戒沙僧等大い懼怖師徒四體天王父子に拜謝すれば天王父子の妖精を率領て天上へ取り去るふ三個の徒弟們の三藏を扶けて又西方大路に出たりけり

難滅伽持園大覺

法王成正體三天然

話說三藏師徒の又西へ向ひて進みける時正の仲夏梅雨の節に當り雨は活ひ日か晒し只管急ぎ行ける處に忽ち前面に善財童子現れ出空中より高く叫んで曰く唐僧靜來りるへ此西五六里の則ち滅法國と呼ぶ土地にして彼國王此三年前より釋天大恩を立一万箇の和尚を殺んと誓ひ道兩年に己に九千九百九十六箇の僧を殺し今四個の和尚を要め殺しく一万の僧を滿んとす唐僧城に入るの宜くその防ぎを做るへ我今菩薩の旨を領して是を告ん爲み來れる

ありとて南を差て飛去けり三藏是を聞て空へ向ひて禮拜し戰々兢々として行者を呼んば何處して此國を過んやと曰へば行者曰く師父愛ひるふ事おかれ今天色既ふ晚んとす若將民城を歸る者有て我門を見れば懸かりおん少時靜靜る所は身を潜め商賈を做て行べしと大路を避て一個の流坎の中へ至り行者八戒悟淨は向ひ你們愛ひ在て能師父を保守老孫先勳靜を打探來るべしとて身を聳して城中へ飛行また一個の樓閣蟻兒と變じ街上へ飛下り六街三市の人家を伺ひ籠を廻りて行ふ此時早黄昏を過たれば家毎に燈光を點じ家裡の先光明か見わたる爰は一簷の飯店あり裡へ入て看ば八九箇の旅人大家々々衣服頭巾を脱捨て酒を酔て打臥居たり行者是を見て一個の計策を思ひ附家裡を飛廻りて燈光を盡く打消本相を現し彼四五箇の衣服頭巾を一筆お狐取情々外へ面へ走り出又雲を飛駕て師父の居る處へ飯り來り三藏に向ひて曰く師父此處を過んと思ひるは和尚の模樣よてい様い様し我今飯店よて幾件衣服頭巾を借來れり我今是を著て俗人お打扮城へ入買人ありと云て飯店の一宿を要り明朝五更の時打立て城を出ば假令我門を見る者有とも和尚と悟るめあらんやと云ば三藏是を聞て都て理ありと是は同じ夫より個々俗人の衣服頭巾を著し袈裟法衣の類ひの皆行李の

裡も取り行者又商議を定め列位は一夜師父徒弟れ字を云出するかれ師父を指て唐大官と
 呼べし八捕を猪三官悟淨を沙四官と呼老孫の孫二官と呼べし店中へ至らば列位都て口を閉
 くべうらす只何幹も老孫一個お任せ置るへ飯店の主人何の賣買ぞと問ハ此馬を牽て孫子と
 倣我馬と賣て活業とす十個の兄弟を夥伴り我馬四個目前へ來りて受ふ一宿を要し六個の
 兄弟們の一群の馬を牽て明日爰來るべしと云ハ店の主人必ず體善て懸待べしと云けれハ
 三個も是を聞て此謀策上計ありと一齊に體び個々准衛置ひけれハ遂ハ白馬を牽て大路へ
 出不多時城門に到りける此時秦平の境外いまだ城門を關す四個直に城中へ入街上へ添て懸
 ぎけるが獨り行者が衣服を偷たる飯店の前へ至れば彼旅人等家裡へ在て或ハ衣服見ずと云
 者も有或ハ頭巾と失ひたりと云者も有て聲々に喚き騒ぎ居たり行者心中含笑然ども夜の事
 されハ不知体よて疾足は過往頼て一幹の飯店を見當行者前み依て門を捕り這裡へ宿すべき
 處や有と呼りければ一個の婦人裡より答て官人連日運方へ入せるへと云又一個の漢子川來て
 馬を牽入急ぎ四個を樓上へ導引いる四個燈籠の後の火陰處より大家樓上へ登る一個の婦
 婦又一個の燈籠を携へ登ると行者曰く今宵月売たれば燈光を用るゝ及ずとて火を吹滅遣ふ

座定りける則二個の漢婦の樓を下りける此家の主人五十有餘の婦人一個の了髪は四碗の茶
 を齎せて樓上へ登り三瓶等四個は向ひ俗も列位ハ那里より來りるふや亦甚の賣買を倣るふ
 やと問けるよぞ行者曰く我等ハ北方より來れる的あり馬を賣て活業とす婦人曰く官人の
 尊姓は何ぞ唱候ふや行者曰く這一位ハ唐大官彼の猪三官這ハ沙四官老孫ハ孫二官といふ
 あり婦人笑て曰く何れも異ある尊姓あり行者曰く世間ハ不多姓名あり我等十個の兄弟と夥
 伴り六個の尙城外ハ在明日一群の馬を牽て此處へ來るべし婦人曰く一群ハ多少の馬を牽
 るふや行者曰く大小百十疋餘り都て皆我牽たる馬の若し唯毛片ハ箇々不一婦人曰く孫大官
 人の寔ハ大人の賈人あり伴僕我家へ宿りるふ若別人の家からハ必ず官人達を住る事能はず
 我家房室潤くして飼草料も又乏しからず幾疋の馬を牽るふとも都て皆能養ひ得べし我家
 爰へ住する事多年我夫ハ趙氏ありしが不幸よして早く世と去我今寡婦ハ此家を存つ是故
 お世人我を喚で趙寡婦と稱倣り我家原來上中下三様ハ客人を管待今小人を先おし君子を後
 ます且房錢を定め候いん行者曰く常言ハ貨ハ高低三等の價有客ハ遠近一般ハ看事無とい
 へり府上怎生三様ハ客を管待や且是を語りるへ趙寡婦曰く彼上中下三様とハ且上様ハ五

果五菜小娘兒を請で陪歌を爲しむ一位毎銀五錢あり中様の三果三菜小娘兒と請す一位毎銀二錢あり下様の尊客も告るよ及す唯便ち飯を用ひ幾文の飯錢を得のみ行者曰く我江湖上も在て那里五錢の銀を出さらんや然る上様を安排來れ趙寡婦是を聞て滿心勸喜樓上と下んと爲とき三藏行者も低語て曰く他猪羊の類ひを用るよ有すやと曰へば行者是を聞て急ぎ趙寡婦を呼て曰く我々今日齋戒日あり鮮を用る事なかれ趙寡婦訝りて曰く官人達の長齋を爲るふや月齋を爲るふや行者曰く我々庚申齋を爲るなり今日即ち庚申あり今宵且素食と安排るへ飯錢の上様も依て奉すべし趙寡婦是を聞て万千懽喜遂に樓上を下りけり此時有りて趙寡婦又樓上へ登り來り行者は對ひ小娘兒の幾個呼べきやと問ける行者曰く我門既より齋戒日あり又六個の兄弟等未だ來らず明日他等が來りし時固々一會も呼で樂むべし趙寡婦が曰く然らば明日十人を請で待候んとて了鬘を喚で家具を收めさせて下りけり三藏また行者も暗々我忒だ辛苦的あり我々若熟睡して頭巾を落し家人等も頭を見れば大いある誤らさらずや一室の黒き處を要めて睡ば可らん行者聞て是理ありと點頭急よ又趙寡婦を呼て曰く

此猪三官濕氣あり沙四官の痴氣有て風を怕る唐大官の黒き處も腫毛病あり我も又差明を好ず一室の黒輕處あらば我々を睡しむべし趙寡婦少時沈吟して曰く我家眺望を専ふして造たれば黒き處一室も亦涼きを好みて作たれば風の殊も透すあり風を思ひ黒きと好み給のり下室も一張の大櫃の侍ふが裡も四五個睡べし程の寛さあり此裡風を通さず亮を透さず爰も入て睡給のり奈何行者曰く甚好我々其櫃の裡も入て睡べし快く前行せよと云ければ趙寡婦婦大いに打笑ひ然るに這方へ來り給へとて前も立て樓上を下る三藏師徒の行囊を取て跡も追きて樓上を下り後房の一邊ある大櫃の裡も入行囊まで擔き入一齋も成て睡たりける趙寡婦上より蓋を鎖し其身も臥房も退きけり辨べし這四個中夏暑氣の時節と云大櫃の裡も氣を閉られ些少の風さへ透されば個々鬱氣も堪難く彼方へ推進邊へ押れ三更過る時刻も睡も着よけり行者の獨却て眠らず故意と搗鬼を云て曰く我等が本身五十兩前日の馬三千兩今兩塔聯の裡も四千兩あり這一群の馬を賣ばまた三千兩有りべし利足もまた許多んと獨細言まことの買人と思ひせ和尚と悟れぬめたる斯云しを豈計んや道家の裡も偷賊ありて今暗も行者が説言を聞急ぎ門外も走出二十餘個の強偷を引來り門扉を破り一齋も動と打入ければ

家内の男女叫び競き四方に散りて逃迷ふ彼強盗僧却て家内の財寶を奪す個々後房の一邊ある大櫃の處に至り彼櫃を縛りて堅く結び住め八九箇の偷賊是を擄ひ亦一個の偷賊白馬を率出し一齊に此家を走り出直り城東に向ひて駈行守門の軍兵を斬殺し城門を出んと倣處へ巡城総兵官と東城兵馬司と人馬を領し城を巡りて飯り來りし倫賊と見よりも夫連すむと指揮しけるよぞ偷賊們の大いなる驚き多勢に敵する事能はぬ四散し成て逃去けり官兵們の倫賊們が捨置て去たる彼大櫃を見ては何等の物あると知れ且旦朝に表開して彼大櫃を開くべしと兵士輩を分付て白馬を率せ大櫃を總兵府の裡に擡き入させ置其夜の大家安歇けり此時三藏櫃の裡に在て是を聞大いなる驚き咄々し行者も云けるは明旦官兵們此大櫃を擄ひて國王の前に至り是を開くべし我門都て僧の身あり必ずしも一方の數に加へて殺さるべし今怎麼して是を遣んやと悲みるへば行者師父を諫て曰く師父放心しるふも我一個の計策ありとて頓て耳の裡より金箍棒を把出し變じて鋼鑽と倣彼大櫃の底に孔を揉穿身を搥して蟻と變じ這孔より爬出て總兵府の戸の透間より外面へ出本相を現し雲を駕て飛行皇宮殿の裡より大分身普會神法を使ひ左の臂上の毫毫を盡く抜下し口より仙氣を吹放幾千の瞋睡虫と變じ

せ嗚字真言を念て當方の土地神を呼出し遣般師父の難を語り你們我助力せよと彼瞋睡虫を殿中へ放たしし土地神命を受けて行者と俱に彼瞋睡虫を皇宮内院五府六部各衙門大小官員の宅内都て品職在者の顔に盡く一變づ、放たしし原來夜陰の事と云彼瞋睡虫顔に住りたる者ども前後も知ず熟睡して奈何なる事とも覺すあり行者又右の臂上の毫毫を若干採取數千の小行者と變じさせ鉄棒を出し幾千口の刺頭刀と變じさせ一個の小行者毎に刺頭刀一口づ、持せ皇宮内院五府六部各臥室へ入て國王を上首后妃宮女大小の官員等が髪を盡く剃落さしむ數千の小行者數千人の髪を剃落し殿中若干の比丘尼と和尚を作倣おき行者忽ち身を搥つて小行者も瞋睡虫も皆原の毫毫返し左右の臂上へ收め刺刀兒を原の鉄棒と倣耳の中へ納し納土地神を返し雲を駕て總兵府へ飛飯り又蟻蟻と變じ屏の縫兒より裡へ入彼大櫃の底の穴より這入て師父は此由を説話入戒沙僧も是を聞て暗く笑ひ居たりけり却説聖且至り内院の宮妃腫を覺し年生より頭冷く覺ゆるみぞ手を轉て頭上を撫て見れば奈何怒ら髪を失ひ一個の比丘尼と成居たりけるよぞ大いなる驚き哭き急ぎ了鼓を呼ければ阿と應て出來る了鼓を見れば是も同じ手籠を亡び圓き頭を抱へ涙ぢぢら出來る情いと驚き又外の了鼓を呼

よ是も猶髪を亡ひ出来る是唯妖怪狐狸の處爲あらんと外の宮女輩を問ひ那箇も皆髪を
て出来るも出来るも残らず尼僧の姿あり大衆驚き且悲み急む官員們を呼ければ出来る官員
又是禿子あり是の怖き外のを呼ば那箇も皆々禿子者々皇宮院内五府六部の裡の男女一箇
として毛髪有るゝ都て皆和尚と成けるも許多の官員盡き狼狽抑奈何なる妖怪の處爲
あらん快く君王は奏聞すべしと個々急ぎ入朝しけるが國王未だ起出給ひず衆官兼宮中近
づき呼醒し奉れば國王驚き何幹えやと出御あれは是亦一箇の和尚皇帝あり衆官是を看
て増々呆果呆唯泪を流し都て五府六部各衙門大小の官員等俱々皆表章を奉り昨宵殿裡の
男女總て皆髪を亡ひたる由を奏聞すれば國王又自己の頭を撫更ふ恐懼を倣給ひ少時両手を
拱き頭を低嘆息して曰ふやう是朕當時許多の僧を殺したる報ひよて天より我を戒め給ふを
るべし朕此後不都れ和尚と殺す事を停止べし能此旨を國中へ觸下すべしと命じ給ひける衆
官此旨を領承し已お退朝せんと爲處お巡城總兵官と東城兵馬司と連忙しく入朝し昨宵
城東よて許多の偷賊は出遇し一五十一仔細奏聞し彼白馬と大櫃を朝庭へ奉居ける國王是を
逐一お聽給ひ衆官も命じて彼大櫃を開しめ給へば裡より四箇の和尚現れ出たり國王はト

め衆位の官員輩行者八戒等が異形ある形勢を見て心中深く怖れををし和尚等ハ那箇より
來れる者ぞと問ければ三藏合掌して曰く貧僧ハ東土大唐王の旨を奉じ西天大雷音寺よ至
り佛を拜し經を求るの僧あり昨宵玉城よ到りし處は國王一万人の和尚を殺し給ふの由を承
解斯の如く俗人の摸樣は打扮て飯店よ宿り大櫃の裡に隠れ睡候ふを計すも偷賊の爲お大
櫃を盗み出され官兵士の手よ度り今又庭上よ至る事を得たり方望ハ君王我等四箇を免して
西方よ赴のしめ給ひ大恩あらん國王是を聞て俄お衆官も命じて三藏を殿上よ登しめ竜
床を下りて三藏を拜し倍も老師父ハ天明上國の高僧あり朕却て失迎の罪あり曾て此國の和
尙朕が行政を誹謗たるを以て朕就ち誓ひ殺し一万僧を殺さん事を要め既お九千九百九十六
箇の和尚を殺したり不期も昨宵宮中の后妃君臣皆盡く髪を亡ひ僧形とあれり是則ち天より
朕が罪を咎め給ふ處ありと首て悟り當下佛門お歸依せんと爲の處あり方望ハ老師父朕君臣
等を門下と倣給ひ國中の財寶を以て献す奉ん行者曰く我々の徳を積の僧あり些一も財
寶を要す唯處持するの關文あり方望ハ陛下是を倒換寶印を用ひるは我々を西方よ送り出
しるのらば必ず其徳は依て國家安全万民快樂を保ち侍らん唯此國滅法國と唱る事忒不許

あり今より欽法國と号するひさし可あらん國王是を聞て大い小僧驚き衆位の官員等も命
に國中よ命を下し欽法國と改めるひける三藏師徒も小時殿を辭し下り別室よ入て法衣を
更め行者密か一根の毛を抜一個の行者と變トさせ三藏の身邊小僧本身の昨夜取來りし彼旅
客等が衣服頭巾を挿抱き隱身の法を使ひ空中を飛行昨宵の飯店の簾端よ衣服頭巾を挿抱し
又殿中お飛返り一根の毛と身お返し師父と供よぞ居たりける國王の三藏師徒を兩日住め万
般の素筵を設け了寧よ是を管待遂に關文を倒換了欽法國の印を用ひ君臣個々列を正し唐僧
四衆と城外よ送り出し七八里を過て別れけり

必猿妬三木母

魔王計者禪

三藏師徒の欽法國を跡よさし西よ向ひて急ぎける一時亦一座の高山お登り前面遙お臨みる
へハ急ち山崖の間より一陣の風登り怪みて看處お亦一陣の霧を發し直よ半空を覆ひ昇る行
者は看て且師父を少時待せ置雲よ凝て空中よ立て山崖の間を打探看か一個の妖精石上お
座し左右よ三四十個の小妖圍繞せり行者の心裡よ思ふやう我今是を師父よ告ハ師父亦必ず怕
れるらん且八戒を欺て那里へ遣し彼妖精等と戦ハせ他等怎麼計の手段あるや見べしと願て

雲を下り三藏の前よ至り打笑て曰く我平生の能千里の間を打探見と雖も今日却て大いお看
錯りたり彼風霧の是妖精おあらず這前面よ一村里あり郷中の人家善根を好み一家一家お乾
飯を蒸て借お施すよて候ふ霧と看し人家の蒸桶の湯氣あり八戒是を聞私よ行者を一邊よ
引往長兄今那里の人家お至り齋を吃て來りしやと低語問行者曰く我今日時を吃て來りたり
那菜蔬太だ鹹くして多く吃難し你去て吃ん事を思ふや八戒曰く我既よ飢たり快く去て彼日
時を吃せんと思ふたり長兄師父お云事おれ行者曰く我師父よ云ハ你一个怎麼して去や八
戒曰く我些一主張ありと云て頓て三藏の前よ到り師兄今前村の人家齋を就て借よ施すと云
我門那里お去て齋を領んと思へども此馬却て草料を要め人家の埒を打撻さハ可らず傍俸お
今風霧霽たれば大家日爰よ在て待るへ我去て些の嫩草を取來り馬お飼て後一齊よ人家よ去
て齋を吃し侍らん三藏大いお懽喜で曰く你平生と替りて今日能心を用ゆ快く草を把來り飼
畢りて後那里よ行べし八戒是を聞て計成たりと喜び釘釘を腰お挿て山の凹よ走り行一個の
脊低和尚と變じ他原經を念る事を知されハ口裡よ上大人を細首木魚を敲き前み行爰よ彼妖
怪の小妖等お命じて大路お出て往來の人を待せける處へ不多時八戒前面より來りけるおぞ

小妖等是を見て一齊に把圍み衣を拽腰と推山艇を拽去んとす八戒其手を捨て曰く你等拽往
 及ばず今我你等が家よ去て箇々の齋を領せんと欲す小妖等が曰く我大王你を奪て煮熟し
 て吃んとするふよ你却て齋を領せんと云や八戒是を聞て大いふ驚き悟の他等の一夥の妖精
 よて有けるを彼強馬温我を欺き齋を施す家有と偽りて爰は遣したりと心裡頗る怒を生ト忽
 ち本相と現し腰より釘鉈を把出し散々突立ければ小妖等狼狽廻り後をも不顧して逃返り
 老妖大王は斯と報ず老妖怒て急ぎ一條の鉄杵を取て駈來り八戒を見て喝つて曰く你何的な
 れバ爰お來り我小妖的を惱すや速くお姓氏を名乗と呼りけり八戒答て曰く我の是東土大
 唐より西天お至り經を取唐三藏の徒弟猪八戒と云者あり你却て我を知ざるや老妖是を聞答
 て曰く悟の你の唐僧の徒弟あるう我這處お在て你等を待事久し怎麼饒し返んやと鉄杵を突
 て打て係る八戒釘鉈を輪して是は當り兩個勇を奮ひて戦ひけり此時行者の師父の後邊は在
 て乍ら吸々と笑ひければ沙僧問て曰く長兄何を思ひて獨笑ふや行者低語て曰く八戒の眞ふ
 獸子あり我は欺れて那里は行未だ飯り來らざるの極て妖精等と戦ひて在あらん我快く往て
 看來るべし師父は告る事おのれと一根の毫毛を抜一個の假行者と變じ彼沙僧と並せ眞身

の空中お飛昇り山崖の一邊に到り看バ八戒の許多の妖怪お圍繞れ前は防ぎ後よ支へ没命的
 と戦ひ居たり行者是を看て聲を厲し八戒不要忙おのれ老孫來れりと叫りければ八戒大いよ
 力を得又更お勇を奮ひて働さける程お遠く妖怪を盡く趕散しけり行者是を得と見届け急ぎ
 原の處お飛歸り仮行者を身よ收め不然体よて師父の後邊は座し居たり不多時八戒一身よ汗
 を流し喘氣不敢駈回りければ三藏驚きて曰く你飼料草の要す怎生這様お連忙く回り來りし
 ぞ八戒身を振して曰師父お是を語るの甚面目さ事おから我師兄お哄欺れ假お馬飼料を要
 るを名とし那里よ去て齋を吃せんと思ひしよ却て一夥の妖怪お圍繞れ命も危うなりしを亦
 師兄の助力を得て漸々お脱れ歸りたりといふ三藏大いお怪みて悟空向より爰は在て那里お
 も出す怎生你お助力せんや行者大いお打笑ひ遂に以實に仔細を語りければ三藏も沙僧も大
 いお笑ひを催しけり行者亦曰く八戒你今開路將軍と成て師父よ保守て爰を過バ此地第一の
 大功と爲べしと云バ八戒聞て向は妖精が手段の知たり遂に是を領掌し然バ我師父を保守て
 此地方を過るべしと前よ進みて山中お分入たり却説彼老妖大王の洞中よ立歸り默然として
 不言座し居たり洞中の小妖等問て曰く大王平生は那里より歸りるへバ喜びの色あり今日怎

生這様お樂みるのさるぞ老妖曰く我久しく東土より来る唐僧の肉を吃ふ者の長生を得と聞
 日毎那里も出て待受たるは不斯も今日他が徒弟八戒と云る者も出遇斯の如く敗陣して逃
 れり他が壓下己は這様の徒弟あり我唐僧の肉を吃はん事協はず今是を憂るありと當下一個
 の妖怪前み出て曰く我向ふ獅陀洞大王の處お在し故他等事能知り他が壓下ふ二個の徒
 弟あり一の徒弟を孫行者と叫三の徒弟の沙和尚といふ彼八戒の二徒弟あり唯怖らへさる彼
 孫行者あり他神通廣大にして能變化を爲五百年前大天宮を鬧せし時も普天の神他を降す
 事能す大王唯他等を無事お過しるふ不知若唐僧を拿んとせば怖くは却て害を引出しるふ
 べし老妖大王是を聞て大い驚き彼猪八戒すら今日の手段あり若孫行者も遇ば奈何して是
 を防んやと愈色を失ひける當下亦一妖前み出て曰く大王那ぞ這様お怖れるふや我一個の計
 策を設て必ず唐僧を拿候ん老妖曰く你怎麼ある計策を用ひて唐僧を拿るや彼一妖の曰く
 且平生も變化お能熟たる小妖を三個擲出し皆俱も老大王の換棒お變じさせ三處も埋伏させ
 置一個の孫行者と戦ひせ一個の猪八戒と戦ひせ一個の沙和尚と戦ひせ置其間も大王の空中
 より手を伸して唐僧を捉へるいと靈裡を探て物を取ら若くならん是を考て分辨梅花の謀計

とい云あり老妖是を聞て満心懽喜頓て變化も熟たる小妖を三個見出し三個の假大王を執做
 山路の一邊お出張て唐僧の来るを待居たり三藏那ぞ是を知ん馬を前めて山深く入るふ處も
 忽ち路傍の樹間より一個の妖精現れ出三藏を捉んとす八戒是を看て怒て曰く你儂の手段も
 も尙憚すやと釘鉈を擧て突て打ちたる妖怪の鉄杵を把て是も當り兩個大い戦ひながら麓の方
 へ下りけり亦も那邊の樹蔭より一個の妖精現れ出行者を眼的て打て懸る行者心得たりと鉄
 棒を把て是を支へ只管も戦ひながら遙那里へ隔りけり亦一個の老妖怪木立の茂みを跳り出
 悟淨を白眼的打て係る沙和尚寶杖を把て相敵し三個三方お離散て没命的と戦ひ居たり眞の
 老妖大王の半空より是を打探三藏一個馬上お在すを看定し頓て虚空より手を伸し唐僧を換
 掴み飛が如くお洞中へ歸りけり

木母 助威 征三怪物
 金公 施法 滅二妖 邪

三個の徒弟們的遂も妖精を趕退け三方より立歸り來り師父を尋れども見えるはず行者大い
 嘆息して曰く是必ず他が分辨梅花の謀計お中りたるからん我快く師父を尋ねて救ふべ
 しと三個一齊お走りけるも這方の山の溪挾み果然一座の洞府あり石門の上も陰霧山折岳連

環洞と云る八固の大字を紀したり行者是を見て是妖精が巢穴あり師父必ず這裡に在すべしと云バ八戒急は釘把を擧て力儘で突破りければ彼石門は一固の大窟穿を開きたり守門的小妖此穴より外面を覗き行者を見て忽ち趕り入て大王は報す老妖大い驚き他今爰は追來るな麼して是を防んや先鋒の小妖曰く我亦一固の計策を設て他を哄欺還すべし他等若飯り去バ寛々と唐僧を蒸熟し受用するへとて兼て拿吃ひし人の死骸の中より似合しき頭を一個尋出し髪を刺落し和尚の頭と做顔は鮮血を塗汚し盤ふ盛て門口に持行高く懸つて曰く大聖爺々怒を止て我告す幹を聞るへ我大王唐師父を帯飯りるひ一處お洞中の小妖何の道理も辨へを互は是を奪ひ合て你一口吾一口と遂は唐師父を喰盡し唯一個の頭を吃餘したり今大聖は是を飯し奉る取遷りて葬送りて活業るへと八戒が突破りたる石門の穴の中より彼頭を投出しければ行者是を看よりも倍は師父己は亡びるひしかと聲を放ちて哭きければ八戒沙僧も一齊に哭倒れ少時前後も知ざりけるが八戒泪を著て曰く長兄我門且師父の頭を埋め供養を做然して後哭すべし行者曰く你賢くも説得たり然ども那里か葬らん八戒曰く我も儘せるへとて穢汚をも嫌ず彼頭を懷裡に抱き山崖に抛り釘把を把て坑を穿ち師父の

頭を埋み上は一固の塚を築き幾條の楊柳を折て墳塚の左右に挿亦幾塊の印石を拾ひて塚の前は積此柳を權の松柏と做師父の墳の頂を遮り覆ひ此印石を權は點心と做て供養を爲べしと亦雨々と哭居たり行者曰く哭くの却て小事あり沙僧の爰は在て墳と行李と白馬を看守よ我と八戒の今より洞府を打破り妖精と奪て屍を裂師父の體を報すべしと兩個一齊に洞門を走り到る守門的小妖們是を看て大王お斯と報す老妖是を聞て急ぎ許多の小妖們を引領喊の聲を發て打出けるを行者の鉄棒を輪し八戒の釘把を揮ひ些少も猶豫す直は羣妖の中へ跑入四角八面を打て廻る許多の小妖們少時の拒み戦ひけれども兩個が必死の勇猛は何かの以て敵し難く打殺さるゝ的數を知悉る四方は散乱して老妖を上首として去方知す逃散たり行者八戒尙も洞門に進みけるお情も這石門彌が上お大石を疊重ね入べき透間も有ざりければ行者曰く情は他今戦ひ在し間お斯まで石を積ふけん一旦墳の處は立飯りて商議を做べきありと兩個打列悟淨が待居處は立飯りしが行者亦云やう他等前門を塞ぎあがら那里へか逃散たるの極めて後門有て洞中に入たるお疑ひあし你等兩個爰は在て少時等べし我日洞の後邊を打探來らんと願て身を轉じて趕り去山の後邊を輪り過れば果的一帯の潤水膝々と流

れて湖の岸邊ふ一座の門有門の一邊は一面の暗溝有り溝の中より紅の水流れ出たり行者
則ち一個の水鼠と變じ溝中へ入り入裡の消息を打探けるは爰は幾個の小妖等人の肉を斬て
晒居たり這故は血流れて紅の水とされり行者是を見て彼肉の中より我師父も居るふあら
んと漫み涙を催しつゝ亦身を變じて飛蟻とあり中堂へ飛去ければ彼老妖床の上へ座し黙然
として在けるが乍ち一個の小妖入來り跪下て曰く大王千万の懽喜あり必要ひるふ事か
れ老妖曰く懽喜といふ懽喜ある事ぞ小妖曰く我當下後門の外の湖の一邊へて人の哭聲を聞急
ふ山上へ登りて打探看ふ唐僧の徒弟等一個の墳の前へ拜して痛哭して居たり想ふお他等向
の頭を眞の唐僧と思ひ是を理て墳を築きたる者あらん行者是を聞て思ふやう今小妖が云處
を思へば懽喜の正しく假首よて師父の還て這洞中へ匿し置て未だ吃さると覺たり我且師父
を尋ねて見と中堂を飛出爰那處尋廻れば爰は一個の小門あり緊く闔て隠たり行者則ち透
間より潜り入て飛行ば一葉の大樹の下へ兩個の人を細縛置たり一個は果的唐僧あり行者是
を見て懽喜の余り忽ち本相を現し師父と一聲叫ければ三藏夢の醒たる如く悟空快く我を救
へと曰ふを行者住めて曰く師父發を潜めるへ身邊へ人あり若し這消息を漏さば或は師父を救

ひ難からん三藏曰く苦からず道人の此山下の樵夫あり唯母と娘と他三個住すと云り他我よ
り向ふ妖精を捉られて爰は在你他をも一齊に救ふべし行者曰く師父少時待るへ我再ひ妖精
が動靜を打探來るべしと亦飛蟻と變じて中堂へ飛至り打探ければ此時許多の小妖輩々蟻
蟻として堂上へ在或は唐僧を煮んと云もあり亦蒸熱して吃んと云もあり或は擡み甌んと云
も有て万般と商議最中あり行者是を聞て心裡お怒り我師父他等と何の仇もあし怎麼道標
師父を吃んと爲やと頼て堂中へ飛入暗へ一把の毫を抜許多の睡睡虫と變じさせ妖精輩が面
へ放ち遣は許多の小妖乍ち一齊に睡を催し眼を摺欠を倣個々座睡倒れける行者又一箇の眠
睡虫を老妖が臉へ放ち遣は不多時老妖も亦臥倒れ刺を發し前後も知ず熟睡たり行者急ぎ師
父の處へ飛行本相を現し開鎖の法を行ひて小門を掃き三藏の細縛を解て援け下し彼樵夫も
俱に繩を脱下し悄悄に後門へ導引出山と轉て舊の處へ飯りければ八戒驚いて曰く沙僧你看
よ師父魂を現し迷ひて我を尋來りるへり行者曰く黙子亂説を云事かかれ師父曾て死し
るはず那ぞ魂を現しるいん沙僧急ぎ師父の前へ跪下て曰く師父那里へ捉りて居るひし
や長兄怎麼して救ひ來りたるぞ行者則ち洞中の動靜亦樵夫が事まで仔細説話ければ八戒聞

も敢ず立上り釘把を取て彼墳を築崩し頭を穿出し微塵も碎きて捨てけり行者則ち師父を安座かき我亦去て妖精を拿へ來んとて頓て亦後門を轉り到り直中堂へ入けるは妖怪一個も眼覺しめなく皆熟睡して居たりけり行者一條の繩を要め老妖を細縛鉄棒を搦出て肩より石崖の下へ降りける八戒見より飛遁り敢々築殺す老妖纏目目開けども手足を縛れ身を搦す事能はず遂に八戒殺されて一個の豹子精と成りけり行者亦彼樵夫を分付て數束の柴を取來らせ八戒を命じて後門を埋め塞ぎ行者身を搦揮て暗睡虫を毛お返し身の裡に火を放つて柴を焚立れば一齊に燃昇り洞中の小妖等睡を醒し脱れ出んとするは前門の石よて積み有後門の猛火盛んは燃立一個も脱るゝ的なく不殘叫びて死たりける三藏の再三徒弟等が苦辛を謝し馬に乗て出るへは彼樵夫前行し且我矮屋を導引入老母を呼で遺故由を訴談此四位の老佛菩薩の我爲の再生の父ありと云ければ老嫗も娘兒も立出て個々四衆を禮拜し是より西天極界まで千里の遠さお過す少時茅眠お足を安歇て往るふべしと懇懇に介抱し素飯を安排て管待然して後四衆を大路に間路し五六十里送り來り泪を揮へて別れ去ぬ

風仙郡冒天致早

孫大聖勸善施霖

斯て三藏師徒の亦西へ向て行事數日よして爰に一座の城地あり城中の光景甚だ冷落して前面の房の簷の下に許多冠帯の人集り居て這徒弟們が模様を見て個々驚き抑是は妖怪ある人あるりと太怪氣を眺居たり三藏則ち進み倚て衆人は對ひ貧道の東土大唐王の旨を奉じ大雷音寺へ至り佛を拜し經を求るの僧あり貴方の開路を不知列公無禮を犯したり万望の罪を免恕るへと云ければ一個の官人身を射て曰く此處は天竺の外郡風仙郡と号す處なり近來連年亢旱は因て五穀不實郡侯爰は榜文を出して明僧を得て兩を斬しめんとするは我々の其榜文を保守官人よて侍へば敢て長老を答るふ非ず三藏是を聞て一邊を顧るへは一張の榜札有り其文は曰く

大天竺國風仙郡那候上官 爲レ榜聘三明師一招收三大法事一技因三連年亢旱一田畝無レ收
富室聊以儉生窮民難三以活命斗粟百金之價束薪五兩之資十歲女易三米三升五歲
男隨人帶去城中權法典衣當物以存身鄉下欺公打劫喫人而願命
爲此出二給榜文一仰望
十方賢哲禱雨救民願以三千金奉謝决不虛言須至榜者

三藏行者を頼て曰く你常能雨を祈る今此處の爲に一場の雨を要り民を救ひ國安んせば豈
万善の事ならずや行者答て曰く雨を喚風を招くの如き事難き事か有ん衆官行者が言
を聞大いに懼昏人を馳て郡侯も道由を報じければ郡侯上官是を聞て満心歡び急ぎ衣冠を
整へ街上より出來り三藏四衆を禮拜し親自開路して四個を府中へ導引往正堂を請じ入衆官
大家禮畢りて後郡侯三藏に對ひて曰く下官這郡を司どりてより以來一連三載の乾荒は遇草
木枯盡し五穀實ず大小の人民盡く餓死に到んとす憐憐今神僧爰も來りる若一場の雨を
賜ひ衆民を救ひるハ千金を以て徳報ひ奉らん三藏行者を指て答て曰く我大徒弟孫悟
空常も能雨を要ひ万望の他も央るへ行者笑て曰く若千金を以て報はんと有れば却て半點の雨
も得べのらず但功を積徳を累ば自然と甘雨降るべし我今一場の雨を要てて你を送り侍らん
と頓て堂下に立て眞言を念動ければ即時東方より一朵の烏雲現れ漸々落し來り雲頭も聲
有て曰く東海竜王敷廣來れり今孫大聖老竜を呼るふ何の命令有や行者曰く別も甚き事非
ず此處鳳仙郡の地連年の旱荒は依て五穀實ず我今竜王を央み雨を施し民を濟ん爲あり竜王
の曰く大聖の央み止事おしと雖も我等原玉帝の命を請されば漫り行雨神將を動す事能ハ

す大聖已小民を救濟の心あらば當下より快く天宮に到りて此旨を准奏しるハ既も玉帝の命
ありば老竜即時も水官行雨神將を呼で一道の雨を降し侍らん行者是を聞て然るに你且歸り去
我玉帝に奏聞すべしと且竜王を歸しめ直に雲中飛去けり郡侯衆官是を見て驚
き十分恭敬を加へ急ぎ滿城の令を傳へ家々香を焚せ天に向ひて拜せしめ俄も素縹を安排
して三藏們三個を管待けり斯て行者の雲を縦ちて一直も西天門に到り護國天王も見て是を
央み鳳仙郡の爲も雨を要たき由を奏しければ玉帝是と聞宣て則ち行者を殿前も宣せるハ你
今雨を要ん事を願ふ三年前十二月廿五日朕出行して萬天を浮遊し三界を監視と思ふ時彼風
仙郡の郡侯齋天の供物を推倒し狗も喰せ穢言を出して罵り罪を犯したり這故も他も三等の
罪を與へ三事を立て今披香殿の裡も有若三事已も滿り即時も雨を與ふべし三事未だ終ずん
ハ你も速も立去べしと曰ひて頓て四大天師も命じるハ行者を頼て披香殿に入て彼三事を
見せしめ給ふ行者急ぎ四大天師も從ひ披香殿裡に至れば殿内も一座の米山十丈許りの高さ
有亦一座の麩山二十丈の高さあり一隻の小雞ありて彼米の山を啄み亦一隻の小雞在て麩の
山を吃ひ居り亦一邊も一座の鉄架あり架の上も一盞の燈光を點し其上も長さ一尺四五寸粗

さ指程の金の鎖を掛て燈火に上り垂たり行者何の故と云事を知ず四大天師は是を問て天師の曰く那那侯上天の罪を犯したる科ふ因て玉帝此三の事と立るひ鶏米の山を味盡し約稿の山を喰盡し燈火金鎖を燒断たる時始めて彼地ふ雨を降すべしとの旨あり行者是を聞て呆果此金鎖何の時ふ焼断ん此米麩何の世よの吃盡さんやと満面愛の色を含み鬱々として殿を退んとす天師笑て曰く大聖憂ひるふ事ありれ這事唯一念の慈悲を倣べ即時救すべし大聖今より下界より下り他を諫めて一念の善慈を行せるへ即時吾們米山麩山を推倒し金鎖も俱も燒断て三事滿れりと奏聞せば雨自然降るべし行者是を聞て大い又懽喜遂ふ天師別れを告て下界に下り鳳仙郡の城中に飛飯り郡侯を見え大い又喝て曰く你三年前十二月廿五日齊天の供物を推倒し怎生狗を喰せたるや這故ふ天地を犯し衆民を苦ましむ你實を以懺悔すべし郡侯是を聞て大い又驚き拜伏して曰く三年前十二月廿五日我妻の不賢も因て惡言を出して争ひ當り一時の怒り又堪す實も其事を倣たる覺あり不期も今上天より罪せらるゝ事斯の如く万望の老師是を救ひるへ行者則ち玉帝三事を立るひし事米山の雞麩山の狗燈上の金鎖の事と仔細説語り你若心を飯し善ふ向ひ念佛看經して佛天は飯依し一箇の善慈を行ひ

さバ即時の罪を免すべし若心を改むる事能されば久しうらすして一命を亡ふべし郡侯再拜して曰く我今より急も其事を行ふべしとて夫より本處の衆僧道人們を残りなく請て三藏を首と倣て大いお道場を開き倉中の金銀を投うちて小民に施し城中城外命令を傳へ大小の人家都て香を焚て念佛せしめ郡侯首め衆官等親自香を熏し天地を拜し一片の真心到る處も充滿たり斯て未だ三日あらざるも忽ち一天鳥雲を發し雷轟々電閃々大雨滂々として降り池塘井溝盡く綠波を現し五栽草木勃然として色を生じければ郡中の官民百姓女童も到るまで手を拍て皆舞躍り万歳を謳ひ懽喜の聲天に振ひ地を搖す郡侯懽喜ふ不堪都て國中の万民と城裡も入しめ唐僧四衆を拜せしめ大いお筵宴を排いて三藏師徒を管待けり三藏の佛を拜せん事を急ぎ翌鳥の袖を別て立出るふ郡侯郡官等の員人をして鼓樂を奏し旗幡を翻し三十餘里を送りて別れけり然して後郡侯の郡中の一の寺院を建立し甘露普濟寺と号け師徒四箇の肖像を造り祠堂の裡に安置し連年四時の祭祠を倣永世香火を傳へけり

禪到三玉華三施三法會

心猿木土授三門人

話説唐僧の喜喜歡々として郡侯は別れ馬を向前て數里の路を過り亦一座の城地に到り忽ち

一個の老者は出遇三藏急ぎ馬を下り當方の何と云る地方ぞと問るへは老者答て曰く此土地は天竺國の下郡玉華州と呼り城中の帝王の則ち天竺皇帝の宗室あり此玉華王の才た賢徳の人あり僧道を尊敬し黎民を愛し玉ふ老禪帝城裡に入るのや管す尊敬を受るのん三藏是を聞て老者お謝し別れ徒弟輩を帶し城中は上前入客館に到り三個の徒弟を館中に住め置關文を把て王府に到り引禮官を見ぬ東土より西天大雷音寺に至りて經を求るの由縁を仔細に語り關文を換ん事を央みければ引禮官此由を聞て朝入て斯と報ず當城の帝王是を聞て急お旨を傳へて唐僧を宣殿上座を賜ひ禮を行ひ關文の花字を押し畢り然後問て曰く國師長老大唐より爰に到る幾許の年月を経るひたるや三藏答て曰く貧僧路は在事已お久し十四遍の寒暑を経たり玉花王笑て曰く然らば十四年あり想ふは途中は耽閑有し成ん三藏曰く途中の事一言は盡し難し難し千万の艱難を受難し今這上郡に到れり玉華王十分懼お已は遠方より來りるよ一個の高徒も在らざるや三藏曰く貧僧三個の小徒弟あり客館中に住め置取て府中へ帶來らず玉華王是を聞て急お當殿官を呼唐僧の徒弟們を宣長老と同く齋を進めよと命するひければ當殿官急ぎ客館中へ到り行者輩三個を導引て殿前へ飯り來る玉華王の他們が異

形ある像を見て大いお驚き色を失ひ立んと爲る三藏上前出住めて曰く千歲爺や怕れるふ事さうれ他們貌の醜しと雖も心け却て忠良あり都て山野の出生されれば禮を行ふ事を不會方望の不敬を赦しるへ是を聞て主王様も心を定め頼て典膳官を呼て四衆を暴沙亭へ送りて齋を賜ひて万般と管待けり元來這玉華王は三個の王子あり皆俱は武藝を好み大王子の一練の鷹眉棍と使ひ王子の一把の九齒釘把を使ひ三王子の一根の烏油黑棒を使ひけるが今日異形ある和尚們大雷音寺へ到り經を求る由にて此ふ來り父王是を見て驚き怕れるひし事を聞て他們極めて妖精の人と粧て來れる成べし我們他を捉て虚實を亂し若妖精あらば打殺さんと個々兵器を携提て暴沙亭へ跑來り師徒四衆を見て呼つて曰く你們の人々妖精か實を以て來歴を語り我輩が手を動すを脱れよと罵りければ三藏飯碗を去下身を射て答て曰く貧僧の唐朝より來れる者にて實は妖精もあらず大王子の曰く你則ち人お似たり彼三個の極て妖精も疑ひあらし行者沙僧頭を擧て曰く我輩都て貌の妖精お似たりと雖も心け却て良善あり你三個何人されば這樣お吾輩を害るや典膳官一邊は在て是を見て曰く長老惱みるふ事かかれ是這三位の即ち我國王の小殿下あり八戒の只管齋を食して在けるが此時漸々吃畢り這方

を顧て曰く小殿下個々兵器を把るふの吾們と手段を争はんと思ひるふにやと云ふ二王子
 是を聞て則ち釘把を打振て勢ひを見せるへハ八戒嘻々と笑ひ出し俗の小殿下も釘把を使ひ
 るふ我も亦同き釘把を持ち今你を見せ侍はんと腰より小の釘把を取り出し一振ふれハ忽ちに
 大太とあり金光燭燭として萬道を輝し瑞氣千條にあり二王子大いお恐れを倣不期後邊へ退
 きけり行者も亦大王子ダ眉眉棍を拿たるを見て耳の裡より金箍棒を取り出し一振打振て腕は
 どの粗細一丈二三尺の長さとお做地上お突立て我這一根小殿下お献進んと云ければ大王子即
 ち駈り倚て是を拿んと爲ふ分毫も動す事能はず大王子且驚き且忙れ面を紅染て退きけり三
 王子ハ原來撒起氣性されハ是を看て憤怒も堪ず烏油棒を廻して沙僧を打んとす沙僧手を以
 て打開き亦降妖杖を取り出せば忽ち瑞光艶々として滿城を照し霞亮粉々として亭中を輝らす
 衆位の典膳官是を看て個々呆呆果果て詞さし三個の王子駈る是を看て遂に心を版し一齊に
 拜して曰く我等凡眼にして神師の降臨を識す不敬の罪を赦しるへ万望ハ一場の武藝を使ひ
 て我輩も好拜せさせ給へ行者是を聞て就ち鉄棒を拿將て這處牽袂して手を展るお好しから
 ず空中に在て一場の武藝を見せ候はんと忽ち五色の祥雲を縦ち吻吻と一聲乍ら半空に飛

昇り金箍棒を打振て一上一下右も廻り左も轉じ黃竜轉身の勢ひを使ひ初ハ人與棒と動上
 る花を添るが如く後ハ人の影を見ず唯一天棒のみ動く若くあり八戒沙僧下お在て少時空
 み居たりけるが堪かねて兩個とも亦空中お飛昇り釘把を使ひ寶杖を輪し上三下四左五右六
 前七後八丹鳳朝陽餓虎撲食の勢ひを倣滿天中お瑞氣氤氳と翻り金光燦爛と霞輝て諸天神
 兵一時に武を演るうと疑ふ此時王府の主王を首め大小の官員滿城中の人民等御て遙に虛
 空を拜し大家奇異の思ひを倣の悟空等三個漸多時有て空中より飛下り俱お師父を拜して座
 しければ三個の王子等急ぎ宮裡に駈返り父王の前お跪下我等首め他等三個を妖精と疑ひし
 る却て是寔の神僧よて我々忒だ紅顏たり今より他等を師と倣て武藝を學ん事を要む万望ハ
 父王是を死し給ハ玉華王是を聞て曰く你等既ハ他を師と爲事を要ハ我親自往て是を迎へ穴
 へべしと遂に皇官を立出風車に座せず微蓋を張ず父子四個歩行して樂沙亭に來り三藏四衆
 を大座に正し老王座を辭て曰く唐老師父に孤一事の要あり三位の高徒是を容給はんや三藏
 答拜して曰く千歳の尊命小徒等何の異議か存ん速に是を命じ給ハ玉華王曰く朕肉眼凡胎
 にして向にハ許多の不敬を倣たり當下三位の高徒空中に在て旋展を現し給ふを見て初て仙

佛の臨凡を知ぬ孤三個の犬子在個々武藝を學ん事を要む万望の老師開天地の心傳を小兒等に度給らば頼城の資を以て謝し奉らん行者笑て曰く我々出家人快く幾個の徒弟に傳ん事を要む小殿下既も這心おらば分毫も財利の事を云へぬらす唯眞を以て學ば足り玉華王是を聞て十分懽喜四衆を亭中に款留せしめ翌鳥三個の王子悟空賢三個を拜し師弟の禮を倣他等が兵器を要て着に原來他輩が兵器の造化自然の寶具あれ凡體の力あて一毫も動搖事能ず行者是を見て曰你等に神力を授けて後武藝を教示べしと三個の王子を一個の靜室に座せしめ眼を閉せ眞言を念て仙氣を腸中に噴入れば三個忽ち精神俄に百倍し進退常と大いに覺れり三個の王子大いに懽喜頓て立出て彼兵器を取學見に心の盡に運し用ゆ然も此兵器の悟空等隨身の寶具といひ且斤數重くして些少手に余る處ゆれば此三個の兵器を式樣と倣個斤數を減下て造しむるに如くと俄に許多の鐵匠を宜入て王府内院より一個の迷殿を携へ大王子の悟空が鉄棒を式樣とし三王子の八戒が釘把を携し三王子の悟淨が寶杖を鑄せける鐵匠の王子の命を受けて迷殿の裡に悟空等が鉄棒釘把寶杖を住置是を見て晝夜精神を籠て鑄造けり却説此玉華城より北七十里に豹頭山と云る山あり山中ふ虎口洞と号る處あり道虎口洞

中に三個の妖怪住り此妖怪精一夜洞門より出て見よ玉華城の方に當り一道の金光赫然と響り天を遮り地を罩ふ妖怪是を見て怪み雲に覆て空中を飛行玉華城より到り打探看に一個の迷殿の裡に三個の兵器あり一個の鉄棒一個の釘把一個の寶杖此三個の兵器金光を纏つにぞ有ける妖怪是を見て大いに驚き且喜びは何人の寶具あると不知然れども當今我眼に中りたるは我も縁有寶具ありとて遂に三個の兵器を奪ひ取又雲より打擲て豹頭山を歸りけり

黃獅精 虛設釘把會

金木土計圖豹頭山

却説幾個の鐵匠の輩連日の苦辛よ因て前後も覺ず熟睡し天明お及で起出迷下より入て看れば三個の兵器を見ず個々驚き驚得斯と王子も報じければ三個の王子も亦驚き出來りて彼處爰尋れども又更に有事あり萬一師父たちの收取るふかり有すやと急ぎ人を遣て問せければ悟空門三人も同く驚き諸俱に出來れば父王も是を聞て急ぎ立出るに都て曾達下あり果して曰く原來凡人の能動すべし兵器にあらす殊に道内院外人の入來る處に有す怎麼夜中ふ失ひたるをあらんと區々に議論して果す行者少時沈吟して曰く借の道近き一處の妖怪の住處ありと覺たり殿下此議怎何玉華王曰く神師の問甚妙あり原此洲城の北より豹頭山と云る山あり山

中は虎口洞あり洞中は一個の神仙亦虎狼妖怪有と云傳へたり孤是と訪されば未何者ある事
と知ず行者曰く然らば彼兵器の妖怪は倫たるは疑ひなし我今去て其消息を打探来るべし
と云りと思へば忽ち半空に飛上り形影の見ず成ふけり斯て行者の北に向ひて七十里余り
飛行一座の山頭を住り四方を望居る處は忽ち山の後邊より兩個の狼頭妖精たち出て驚駭を
しつゝ駈りける行者是を見て急し身を胡蝶と變じ翻々翻々と飛行一個の妖精が頭を住り
何が行む從ひけるは彼妖精は管説話して曰く昨夜大王の得るひし三件の兵器の世間無類の
寶具あり明日釘把會をやるふされば我輩も必ず受用あらん我輩今道二十兩の銀子を兩三
兩分ち取旦幾杯の酒を買また一件の衣服を買て我々が得と做其後猪羊を買花帳を作りて販
るべしと列笑大路を上げて急ぎける行者要子を聽得し借の洞中の妖精が倫たるは極りたりと
心裡暗に憤喜今這兩個の妖精を打殺んと欲要をも鉄棒を偷れたれば手は物なし還小飛下り
て本相を現し妖精に向ひて一口の唾を腹下定身の眞言を念ければ兩個の妖精身を搦す事能
ず手脚を眞定て站住けり行者則ち他を抜倒し衣服を掲げ看れば果的二十兩の銀子あり亦腰の
粉の牌兒を掛たり一個の刁鑽古怪一個の古怪刁鑽と寫着たり行者還銀子と牌兒とを奪取

急ぎ雲を駕て玉華洲の飛飯り王府に到り主老王亦三個の王子を見ぬ動靜を仔細語り今沙僧
八戒を同伴再度那里に到り寶具を拿返し来るべし用ての許多の猪羊を買求めたしと告けれ
ば玉華王是を聞て急ぎ下官を命じて幾件の猪羊を買得り行者は遞與ければ行者是を手お把
て八戒沙僧と諸供も再び雲を打乘て空中に飛去けり斯て三個北に向ひ約頭山の飛行間定
身お俄置たる兩個の妖怪の處に到り八戒は這妖怪の像を看せ則ち刁鑽古怪も變じさせ行者
の古怪刁鑽も變じ彼牌兒を腰に着沙僧の商客も變じさせ山の後邊に到り凹ある處に出け
る亦一個の青臉紅毛の小妖手お書匣を携へ東南に向ひて出來り行者を見て古怪刁鑽飯り
たるう你幾口の猪羊を買來りたるや行者曰く猪羊合せて十五口あり你の那里か去や小妖曰
く我竹節山も行って老大王を請て明日の釘把會へ赴しめんとす行者曰く你其請帖を我も看
よと携拿て書匣を開きて看れば一張の紙が寫着て曰く
明晨敬治三肴酌慶釘把嘉會
屈二尊車從一過山一叙幸勿外至感
右啓
祖翁九靈元聖老大人尊前
門下孫黃獅額首百拜
行者看畢て仍ち小妖は遞與ければ小妖急ぎ受把て竹節山へ赴きけり行者兩個は謂て曰く黃

解の必ず金毛の獅あるべし彼九靈元聖とい何者あらんと語りつゝ只管大路を行處ふ不多時
 壹箇の洞門を看是則ち虎口洞あり大小の小妖們刁鑽兩個が歸り來るを見て門を掛く行者輩
 三個前み入バ亦一個の小妖是を見て大王お斯と報すれば妖王出來り刁鑽兩個歸りたるの你
 多少の猪羊を要め來りしど亦那處お帶來りし何的あるぞ行者曰く猪八口羊七口猪の價十
 六兩羊の銀九兩あり向の銀子二十兩を遞與則ち五兩の不足あり這箇は是則ち猪羊を賣たる
 客人あり彼銀子を乞ん爲且大王の得るひし寶具を拜看の爲來りたり妖王是を聞て曰
 く彼寶具の玉華州城中より得たる兵器あれバ若道客商彼城中より到り人よ語らバ悪りりあ
 ん你無要の事を語りたる行者曰く道客商原他郷の個決して彼城裡お到る事なし大王且他を許
 して裏お入しめ銀子と飯を與へて歸するへ妖王曰く既お斯の如んバ酒飯を與へて歸らせよ
 と遂は三個を堂中お入しめけり悟空們三個堂上登りて四邊を打控見バ一個の廳上は彼
 釘把を置鉄棒と寶杖を兩邊お侍掛たり八戒是を見より直お本相を現し駈入て釘把を取受よ
 及で行者沙僧も本相を現し彼廳上お飛上り鉄棒と寶杖を推把展一齊は外面お討て出る妖
 王是を看て大いお驚き你們是生麼的あれバ我寶具を偷ひやと罵りければ行者怒て曰く你

賊毛團我輩を知らざるや我は是東土の聖僧唐三藏の徒弟輩あり玉華洲の三個の王子我門を師
 として武藝を學び我門が寶具を損壊し做他輩が兵器を造鑄しめんと内院邊殿お放在たるを
 你夜陰は偷把却て我門を虐頭騙と云や汝今我等が兵器を試看と三個一齊お打て掛れば妖王
 是を看て四明鎚を打振て跳り出少時支へ戦ひけれども那ぞ三個お敵すべけんや遂は力衰
 へ東南お向ひて風を發して逃去けり三個更は是を追す洞中を駈通り小的の妖精們と盡く打
 殺し火を放て洞を燒拂ひ遂は三個雲は打乘玉華城お飛歸り三件の兵器を三個の王子お遞與
 ければ王子の輩を上首として衆部の官員等大いお懼喜虎口洞の光景と逸件は問聞悟空等三
 個が神通を稱しけり然ども玉華王一個大いお憂の色有て曰く彼妖精逃去て今往方を知ず恐
 くバ再般來て警を假んり行者是を聞て曰く殿下必ず愁ひるふ事勿れ我明且他等を降伏し候
 はん玉華王是を聞て心安塔筵宴を開いて只管は管待師徒四個遂お其日の箇中お安歇けり却
 說那妖王の東南を指て飛去其夜遂お竹節山九曲盤垣洞に到り洞中お駈入て祖翁老妖お見え
 昨宵玉華洲よて三般の兵器を拿返り今日亦東土唐僧の徒弟と云る輩の爲は大いお洞中を關
 せ今敗北して逃來れる由を語り万望の祖翁援兵を請て警を假せん事を要め侍ふと云ければ

老妖是を聞て曰く悟の汝他輩が事を知らず錯惹て他を犯したり彼輩門の是原尋常の個よわら
 ず嘴長く耳大いある的の猪八戒腹氣色臉ある的の沙悟淨あり這兩個の尙苦のらす其毛臉雷
 公の若き和尙の名を孫悟空と呼神通廣大ある事太甚し是を仇を報せんと思ひ汝が手段よ
 行べうらす我親自去て他門を拿汝の恨を露しめんと願て孫神聖神殺殺親親白澤神伏狸神猪
 象獅の輩其外諸孫を不殘引領し個々兵器を擧提て一陣の狂風を發し彼黃獅精を前へ進め
 經ふ豹頭山より見ゆ洞府洞門皆一理の灰燼と變て大小の羣妖等盡く地上へ横倒て一箇も
 息有的あじ妖王是を見て大い又驚き且怒り他等怎生道殺ある惡を作や我今洞府を焼れ家子
 等を殺れ何れの處お身を倚んと涙を流して悲哭ければ老妖是を諫勸て曰く既お愛お到りて
 哭泣ども益あし今より經ふ玉華城を推倚唐僧も國王も一齊に捉得て汝が仇を雪むべしと
 亦一齊に引領て玉華洲よぞ飛去ける斯て翌日玉華城裡の人大家起出て看處に忽ち一群の
 妖精沙を飛し石を降し城頭に向ひ推倚來る國王衆官を首め城裡の老若男女の輩是を見て
 大い又驚き打戰兢てぞ居たりける行者打笑ひ大家怖るゝ事ありれ是彼黃獅精が祖翁九靈元
 聖を請て昨日の仇を報んとして來れるあり我輩三個馳向ひて他門を捉得來べしと八戒悟淨

を引領て忽ち雲ふ飛騎て城外へ移り出て半空ふ有て待受たり

繪本西遊記卷之六畢

明治十六年九月十五日 御届

同年九月廿八日出版

編輯人 青森縣士族 手塚盛壽
 出版人 東京府平民 辻岡文助
 日本橋區横山町 三丁目貳番地

一板垣君近世紀聞	三編大尾	一水錦隅田	三編大尾
一川千鳥天の網船	全	一綾重衣紋迺春秋	三編大尾
一思案橋曉天奇聞	三編大尾	一名廣澤邊萍	三編大尾
一娘淨瑠璃噂大鐘	二編大尾	一晚競心の三俣	三編大尾
一賞集花之庭木戸	六編大尾	一格蘭氏傳倭文賞	三編大尾
一新編伊香保土産	八編大尾	一冬楓月夕榮	三編大尾
一河内山網代乗物	三編大尾	一蓆旗群馬嘶	三編大尾
一高橋阿傳夜刃譚	八編大尾	一庚申通夜譚	二編出版
一夜嵐阿衣花迺仇夢	五編大尾	一聞多風流西洋床	前編二編大尾
一國定忠次義名高島	五編大尾	一戀相場花王夜嵐	三編大尾

出版書目

八百屋於七胡蝶の夢	全一冊
雪鏡談	全三冊
楠公記	全三冊
西遊記	全五冊
參考源平盛衰記	原本七拾五冊
南総里見八犬傳	原本百六冊
通俗繪本三國誌	原本七拾五冊
青砥藤網摸稜案	全一冊

